



日本地質学会 *News*

Vol.28 No.3 March 2025



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理事

任期：2024年6月8日から2026年総会

会長（代表理事）	山路 敦（京都大学）	笠間友博（箱根町役場）
副会長	杉田律子（科学警察研究所） 星 博幸（愛知教育大学）	加藤 潔（駒澤大学） 香取拓馬（フォッサマグナミュージアム） 金丸龍夫（日本大学） 神谷奈々（京都大学）
常務理事	亀高正男（大日本ダイヤコンサルタント（株））	川村紀子（海上保安庁海上保安大学校）
副常務理事	内野隆之（産業技術総合研究所）	清川昌一（九州大学）
執行理事	岩井雅夫（高知大学） 内尾優子（東京国立博物館） 大坪 誠（産業技術総合研究所） 尾上哲治（九州大学） 加藤猛士（川崎地質（株）） 小宮 剛（東京大学） 坂口有人（山口大学） 高嶋礼詩（東北大学） 辻森 樹（東北大学） 細矢卓志（中央開発（株）） 松田達生（工学気象研究所） 山口飛鳥（東京大学大気海洋研究所） 矢部 淳（国立科学博物館）	桑野太輔（京都大学） 小松原純子（産業技術総合研究所） 齋藤 眞（産業技術総合研究所） 佐々木和彦（佐々木技術士事務所） 澤 燦道（東北大学） 沢田 健（北海道大学） 沢田 輝（富山大学） 下岡和也（関西学院大学） 菅沼悠介（国立極地研究所） 高野 修（石油資源開発（株）） 田村嘉之（千葉県環境財団） 中澤 努（産業技術総合研究所） 西 弘嗣（福井県立大学） 野田 篤（産業技術総合研究所） 広瀬 亘（北海道立総合研究機構） 松田博貴（熊本大学） 道林克禎（名古屋大学） 矢島道子（東京都立大学） 山本啓司（鹿児島大学） 和田穰隆（奈良教育大学）
理事	青矢睦月（徳島大学） 天野一男（東京大学空間情報科学研究センター） 磯崎行雄（東京大学） 大友幸子（山形大学） 岡田 誠（茨城大学）	

監事

任期：2024年6月8日から2028年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル
電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）
e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.28 No.3 March 2025

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

訂正……1

公募……2

東京学芸大学教育学部自然科学系テニユアトラック教員公募／東京大学地震研究所令和7年度第2回大型計算機共同利用公募研究の公募

各賞・助成……2

令和7年度放射線安全管理功労・環境放射能功労表彰候補者の推薦について

紹介……3

月面フォトアトラス 精細画像で読み解く月の地形と地質 白尾元理著(石渡 明)

博物館・ジオパークで地球を学ぼう！……4

美祿市立秋吉台科学博物館：秋吉台のあらゆる資料（モノと情報）を整え未来へ継承する（藤川将之）

CALENDAR……6

2025年地質の日行事……7

街中ジオ散歩in Chiba 身近な地形・地質から探る稲毛海岸の歴史／第16回惑星地球フォトコンテストほか入選作品展示会／オンライン一般講演会 ナウマン来日150年 その功績と足跡を辿る／第42回地球科学講演会「地質の日」協賛行事「関西で考えるべき活断層地震の揺れ」／一般公開講座「海底に眠る南下浦断層」

TOPIC……9

旧石器人の琉球列島への航海（後編）（高山信紀）

2023年度卒業生・修了生対象 地質系若手人材動向調査報告……11

支部コーナー……15

関東支部：2025年度関東支部総会・講演会開催のお知らせ／関東支部サイエンスカフェ「地震がつくる大地 ～隆起でできた日本列島～」実施報告

訃報……16

院生コーナー……17

第7回国際レルゾライト会議 参加報告（松山和樹）

表紙紹介……18

Nkhachira Permian coal Mine, マラウイ, アフリカ（清川昌一）

学会記事……19

2024年度第3回理事会議事録

2024年度第5回執行理事会議事録

2024年度第6回執行理事会議事録

2024年度第7回執行理事会議事録

2024年度第8回執行理事会議事録

巻末 入会申込書

訂正

ニュース誌2024年12月号（Vol. 27, No.12）掲載記事の著者名に誤りがありましたので、ここに訂正いたします。

p. 7, 学協会・研究会報告「国際 Gondwana 研究連合2024年総会及び第21回 Gondwana からアジア国際シンポジウム参加報告」

(誤) 鈴木啓介

(正) 鈴木敬介

印刷・製本：日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけましようお願い致します。



東京学芸大学教育学部自然科学系 テニュアトラック教員公募

1. 職名及び人数：講師1名
2. 所属組織：

研究組織：自然科学系 広域自然科学講座 環境科学分野

教育組織：理科（地学）教室

※改組等により、所属する研究組織若しくは教育組織が変更される場合がある。

3. 専門領域：岩石鉱物学

4. 職務内容：

(1) 学部生並びに大学院生の教育・研究指導：主な担当科目：【学部】理科コース入門セミナー、地学概論Ⅰ、地学概論Ⅱ、地学実験、地球科学B、地球科学野外実習、地球科学実験、地学特別演習A、地学特別演習B、卒業研究【大学院】サイエンスフロンティア特論、理科の実践演習Ⅱ、理科の内容構成開発と実践B、理科の高度研究開発法(2) 岩石鉱物学に関する研究(3) 教員養成及び大学運営に関する業務

5. 応募資格：

(1) 博士の学位又はそれと同等の研究業績を有すること。(2) 授業及び職務遂行に支障のない日本語能力を有すること。(3) 本学が教員養成系大学であることを理解し、関連業務に積極的に従事できること。(4) 学部・大学院における地学・環境科学関係の講義（野外実習を含む）並びに学生・院生の研究指導を担当できること。(5) 理科（地学）教室・環境科学分野と協働して、学内の各種プロジェクトに参画できること。(6) 担当科目について、教職課程認定上必要とされる教育又は研究上の業績を有していること。(7) 小学校教諭、中学校教諭（理科）及び高等学校教諭（理科）のいずれかの教員免許を有することが望ましい。

6. 採用予定日：令和7年10月1日

7. テニュアトラック期間：5年（令和12年9月30日まで）

提出期限 令和7年4月15日（火）必着

問い合わせ先：

東京学芸大学自然科学系 環境科学分野主任 佐藤公法

メールアドレス：sato-k@u-gakugei.ac.jp

なお、「勤務形態・給与等」に関する問い合わせ先：

東京学芸大学総務部人事課人事係

メールアドレス：jinjika@u-gakugei.ac.jp

*詳細は、以下大学 HP でご確認ください。
https://www.2u-gakugei.ac.jp/~jinjika/shokuin-bosyu/01_daigaku-kyouin/r070218_kankyokagaku_tenu_jp.pdf

東京大学地震研究所 令和7年度第2回大型計算機共同 利用公募研究の公募

地震・火山・防災の関連分野では、大量のデータを用いたり、大規模計算を実施するといった大型計算機を利用しなければならない研究分野が増えてきました。しかし、大型計算機は、限られた資源であり、広く一般的に利用できる状況には至っていません。そこで本研究では、2020年度より、地震・火山・防災の関連分野の研究遂行に関わる大規模計算を行う研究課題（以下地震火山防災研究）を公募しています。

応募資格：国内外の大学、国・公立研究機関の教員・研究者又はこれに準じる者（名誉教授・大学院学生・財団等民間団体や企業の研究者）なお、大学院学生は、「C 挑戦的研究」を除き、研究代表者となることはできません。※若手研究者及び女性研究者からの積極的な応募を歓迎いたします。

申請方法：共同利用 HPにある所定の様式に必要な事項を記入のうえ「Web 申請システム」から申請してください。

研究期間：採択日から令和8（2026）年3月末まで

申請期限：令和7年5月30日（金）【厳守】

経費支援：大型計算機共同利用公募研究での経費支援はありません。

書類提出、問い合わせ先：

〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学地震研究所 研究支援チーム（共同利用担当）

電話：03-5841-1769, 5710

FAX：03-5689-4467

E-mail：k-kyodoriyo@eri.u-tokyo.ac.jp

詳細は、別添公募要領及び地震研究所（共同利用）ホームページをご覧ください。

https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2025/03/2025-2_supercomputer.pdf

各賞・ 研究助成



令和7年度放射線安全管理功労・ 環境放射能功労表彰候補者の 推薦について

（公財）原子力安全技術センター、（公社）日本アイソトープ協会、（公財）日本分析センター及び放射線障害防止中央協議会では、原子力規制委員会の後援を受け、「令和7年度放射線安全管理功労・環境放射能対策功労表彰」として放射性同位元素等の安全取扱い又は環境放射能対策の向上のために尽力して優れた成果を上げた個人に対して表彰を行うこととなりました。

この表彰では、放射線安全管理及び環境放射能対策の2分野において功労者を表彰することにより、関係者の更なる意欲の向上と安全確保に対する国民の理解の増進に資することを目的としております。

なお、運営は「令和7年度放射線安全管理功労・環境放射能対策功労表彰顕彰要綱」に基づき行い、功労者の選定にあたっては、審査委員会を設置し、公正な運営を期することといたします。

主催：（公財）原子力安全技術センター、（公社）日本アイソトープ協会、（公財）日本分析センター、放射線障害防止中央協議会

後援：原子力規制委員会

提出書類：「令和7年度放射線安全管理功労・環境放射能対策功労表彰顕彰要綱」をご参照下さい

提出（推薦）期限：令和7年6月30日（月）【学会締切：6月2日（月）】

提出・連絡先

(1) 放射線安全管理功労者表彰：

（公社）日本アイソトープ協会 学術振興部 学術課

メールアドレス：anzen-hyosho@jrias.or.jp

電話：03-5395-8081

(2) 環境放射能対策功労者表彰：

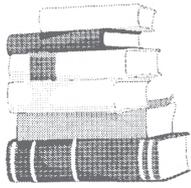
（公財）日本分析センター 経営統括部 経営企画室

メールアドレス：hyosho@jac.or.jp

電話：043-424-8661

詳しくは、

<https://www.nustec.or.jp/korohhyosho/korohhyosho01.html>

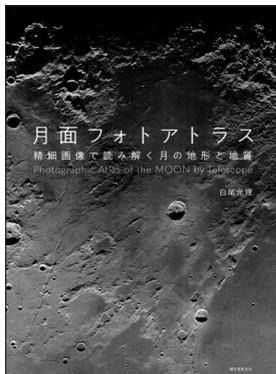


紹介

月面フォトアトラス

精細画像で読み解く月の地形と地質

白尾元理著



誠堂新光社 2025年2月15日発行、
A4判、239ページ、
ISBN978-4-416-52409-1 定価4400円+税

本書は、著者所有の口径35cm反射望遠鏡で撮影した高解像度の月面写真を用いて、月面の表側（地球に面する側）を14地域に分け、地域ごとに数枚の写真を示して解説を加えた月面写真地図である。著者の前著「月の地形ウォッチングガイド」(誠堂新光社、2009)では周辺部に漏れた部分があったが、本書では全面を漏れなくカバーしている。前著ではA5判の写真だったが、本書では全て見開きA3判(面積で4倍)で、各々が1000枚程度の写真を処理して大気の影響を取り除くイメージスタッキング法による高解像度写真なので、迫力と分解能が違う。そして、前著と同様、地域別の写真・解説の前に、月齢順の月の全体写真がある(p. 12-59, 月齢3~27)。特定の海やクレーターに注目して月齢順に写真を見ていくと、太陽高度の変化による地形の見え方の移り変わりがわかる。著者によると、本書の喉(のど、紙を綴じた部分)は丈夫に作っており、ページを大きく開いて見ても大丈夫とのことである。

月齢順の写真の中に満月の写真が2枚あり、そのうち1枚がカラーで、色の違いを強調してある(p. 36-37)。このような月のカラー写

真は初見で驚いた。例えば、アポロ11号が着陸した静かの海(ウサギの顔)は黒く(著者によれば青く)、その北の晴れの海(ウサギの胸)は赤くて周辺部が黒い。その西の雨の海(ウサギの胴)は東部が赤くて西部が黒く(p. 34, 46, 172でも明暗の差がわかる)、黒い部分は溶岩流の地形が顕著である。嵐の大洋や雲の海・湿りの海など西半球の海は黒い部分が多く、黒い部分はチタンが多い玄武岩とのことである。武田弘(2009)「固体惑星物質進化」(現代図書)のp. 87に米国のクレメンタイン探査機による月全球のチタン分布図(蛍光X線分析による)があり、この図の高チタン地域($TiO_2=3\sim 10\%$ 程度)は確かにこの写真の黒い部分とよく一致する。実際、アポロ11号は静かの海から高チタン玄武岩を持ち帰り、その中からarmalcolite $FeTi_2O_5$ という新しいチタン鉱物が発見された(チタン鉄鉱ilmenite $FeTiO_3$ よりTiが多い。名称は3人の飛行士に因む)。その後のアポロは低チタン玄武岩を持ち帰ったが、最後の17号(晴れの海の南東縁)が再び高チタン玄武岩を採集した(ただし、極低チタン玄武岩もあった)。

目次に沿って本書の構成を示すと、はじめに、インデックスMAP(各章冒頭にもある)、月の地名の読み方、月を見るための機材(双眼鏡・望遠鏡)、月齢別月面ガイド(上述)、地域別月面ガイド(上述): 1. コペルニクス周辺、2. 雨の海、3. 静かの海、4. 晴れの海、5. 神酒の海、6. 南部高地、7. 南東部高地、8. 中央部、9. 嵐の大洋、10. 湿りの海、11. 北部高地、12. 東縁部、13. 雲の海とその東部、14. 西縁部、そして「さらに月を知りたい人のために」として、月の公転・自転と見え方の関係、月を撮影するための機材/画像処理方法、LRO(Lunar Reconnaissance Orbiter, 米国の月周回機)で月を見る、月探査機一覧表、写真データ(著者撮影写真各々の年月日時分、月齢、秤動等)、参考文献/ウェブサイト、地名索引を載せる。なお、裏側も含むKAGUYA月面図を併用すれば表側周辺部の歪んだ地形の理解に役立つ(石渡, 2016: <https://geosociety.jp/faq/content0666.html> 参照)。

本書には、米国のアポロ計画で飛行士が撮影した写真やLROの写真等も、解説の必要に応じ多数示されている。「かぐや」が発見した静かの海の直径100mの縦孔をLROが真上と斜め上から撮影した写真(p. 97)は、孔の底に太陽光が当たり、角ばった岩塊が散在する様子や、孔壁に水平な溶岩層が露出する様子が写っている。著者はこの孔底に探査機を着陸させる日本のUZUME計画に期待を寄せている。

本書の地域別の各章には1つずつ充実したコラム記事がある。1. 月のクレーター: 火山説vs隕石説、2. 月の時代区分、3. 「かぐや」が発見した月の縦孔(上述)、4. タウルス・リトロロー谷: アポロ17号の着陸地、5. 高地に着陸した唯一のアポロ16号、6.

ティコに注目(チクシュルブと兄弟?)、7. クレーター年代学とは、8. 嵐の大洋はアメリカの無人・有人着陸地点、9. 月にもあった大型火山(マリウス丘等)、10. 月の谷、11. クレーター年代学で若い年代を調べる、12. オニール橋の謎、13. 月の表面を形作った衝突と火山活動、14. オリエンタレバイスン(東の海を中心とする多重衝突構造)発見記。そして、各章には詳しい地名解説があり、月齢別写真を含め、各写真の一隅に白文字で説明を記している。

なお、「11. 北部高地」の最初の写真(p. 168/169)は、虹の入り江に近い雨の海北部の嫦娥3号(中国)着陸地点を示すが、同写真内にある嫦娥5号着陸地点(石渡, 2021: <https://geosociety.jp/faq/content0995.html> 参照)は示していない。巻末の月探査機一覧表は昨年(2024)の嫦娥6号まで載せるが、4号と6号は裏側に着陸した。昨年1月に日本のSLIMは危機の海西方、多重衝突構造内に着陸したが、これは「かぐや」がマントル起源のからん石を発見した場所を選んだという(p. 107)。

本書のカバーは月面写真が全面に印刷されているが、この写真の説明が見当たらない。表紙側にヒギヌス谷とアリアデヌス谷が写っており、上(西)は月面中心を含む上弦の月の欠け際、下(東)は静かの海の西端、右(北)は蒸気の海、左(南)はアルパテクニウスで限られ、デカルト高地のアポロ16号着陸地点を含む地域と思われる。唯一高地に着陸したアポロ16号の予想外の成果については、著者の2009年の前著第33章「中央部の高地: 高地に火山活動はあったか?」(p. 136-138)に詳しい。この話は本書第5章のコラムにもある。そして、本書第2章p. 81はアポロ15号(ハドレー谷)、第3章p. 89, 91, 96はアポロ11号(静かの海)、第4章のコラムはアポロ17号(晴れの海東部、タウルス・リトロロー谷、ショーティ・クレーター)、第8章のコラムはアポロ12号(知られた海)と14号(フラ・マウル丘陵、知られた海東縁)の成果について述べている。

本書は月面全体を大画面で漏れなく示した写真地図として使いやすく、しかも写真の質が非常に高い。双眼鏡や小望遠鏡での月観察にはこの上ない案内書である。科学的な読み物としても優れており、自分で月の写真を撮りたい人には専門的なガイドとなっている。欲を言えば、地名索引だけでなく、事項索引もあればよかった。

満月時は月面の色の違いがわかりやすく、ティコ(1.9億年前, p. 125)やコペルニクス(8.5億年前, p. 65)から射出する光条(天体衝突の痕跡)、月面中央付近の数ヶ所の黒色部(DMD, 溶岩噴泉の噴出物, p. 139, 前著33, 110)、そして上述の海の溶岩の色の違い(チタン量の差)等、本書を読んで小望遠鏡での月面地質学を楽しもう。

(石渡 明)



博物館・ジオパークで地球を学ぼう！(38)
美祿市立秋吉台科学博物館

info

美祿市立秋吉台科学博物館
〒754-0112 山口県美祿市秋芳町秋吉11237-938
URL: <https://akihaku.jimdofree.com/>
休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

秋吉台のあらゆる資料(モノと情報)を整え未来へ継承する

学芸員 藤川将之

1. はじめに

秋吉台科学博物館は日本最大級のカルスト台地“秋吉台”上にあり、博物館の正面には石灰岩柱が群立する雄大な草原を一望できます。秋吉台を対象とした研究の歴史は1903年、当地に大石灰洞があるとの報告が地質学雑誌に雑報として掲載されたことに始まります。その後、フズリナ化石の分布に基づき地層の逆転構造が発見されたことにより徐々に国際的な認知度を高めていくことになりました(写真1)。秋吉台は観光地としても著名であり、その南麓に開口する秋芳洞(あきよしどう)とともに山口県を代表する景勝地として国内外に広く知られています。しかしながら、博物館創立の直接的なきっかけとなったのは米軍による爆撃演習場としての使用申し出でした。地域一丸となった反対運動の末、その計画を撤回させたことが契機となり、自然保護と学術研究の拠点として1959年に設立されました。そのような経緯から、当館は秋吉台の自然を守り、秋吉台地域に広がる石灰岩台地の学術的重要性を国内外に広く周知し、研究活動を通じて文化的価値を高めていくこと、また学校教育・社会教育にさまざまな観点から関与し、広く普及教育の発展に寄与することを基本理念としています。

館名には科学博物館とありますが、地学・生物学をベースとしながらも地域のひとびとに関わる歴史も対象としています。またオンラインサイトの博物館で対象とすることの利点を生かし、地域特有の環境系であるカルストについても深く掘り下げるようにしています。本館、講座室のほか図書分館、天然の石灰洞を利用したこうもり穴地下実験室、屋外前庭の展示スペースがあり、草原上には解説板つきの散策路を備えています。

2. 展示の概要

2階建ての本館にある展示スペースは狭小ながら、秋吉台に由来する資料(モノと情報)を可能な限り網羅するよう努めています。また、学問分野ごとに分離独立した縦割りのものとならないよう、学際的な繋がりを意識した展示を心がけています。例として、秋吉台上で発掘された縄文時代の矢じりには大分県姫島産の黒曜石製や香川県産サヌカイト製のものがあること、そのことから当時のひとびとが瀬戸内海を介して盛んに交流して

いたことが分かることなどを紹介しています。

当博物館は創立より65年が経過(2025年3月現在)していますが、数年前までは大規模な展示リニューアルが行われていなかったので、展示物の老朽化や陳腐化、情報の更新ができていないままであるなどの問題を抱えていましたが、2021年より複数年計画でテーマ区画ごとの大規模リニューアル事業が進められることとなりました。これは当市のMine秋吉台ジオパークが日本ジオパーク再審査において博物館の整備を要することを指摘されたことに端を発します。秋吉台に立地する科学博物館として誰を対象としたのか、秋吉台の科学的価値とは何か、利用者に何をどこまで伝えたいのか、といった根幹部分の洗い出しから再スタートし、現在も様々な立場の方のご助力を得ながらリニューアルが進んでいます。

①地球の歴史、そして秋吉台の成り立ち展示室 大規模リニューアル事業のスタート地点であり、宇宙誕生から現在までの自然史を和英二か国語表記のA2判解説パネルと岩石・化石標本で紹介しています。各パネルは時間軸に沿った並びで示され、それらと向かい合う形で反対側の壁面に秋吉台の誕生から現在までの地史を紹介しています(写真2)。全体を通して地球と生命の共進化を意識した解説を心がけています。ここで推したい展示物は故松本達郎九州大学名誉教授より創立時に寄贈頂いた北海道産アンモナイト化石(*Mesopuzosia cf. pacifica*)です(写真3)。表面には複雑に入り組んだ縫合線を観察することができます。

②秋吉台とひとびとの関わり展示室 ①の展示室に続き、人類の活動が秋吉台の環境とどのように関わってきたかについて紹介しています。秋吉台上では旧石器時代の遺物が出土しており、先史時代より人類が生活の場として利用してきたことが分かります。秋吉台東麓にある日本最古の公営銅山、長登(ながのぼり)銅山は白亜紀の火成活動により形成されたスカルン鉱床であり、奈良の大仏造営にはここで採掘された銅が使用されたことが分かっています。秋吉台上に広がる草原は草資源を利用するための人為改変の結果であることを江戸時代の絵図などを示しながら解説しています。地下空間で成長する石筍を試料と

した化学分析により、森林から草原への変遷時期は約300年前かそれ以前と推定されています。これらは古文書等の歴史記録とも整合的です。本展示室では地域のひとびとが様々な地域特有の資源を活用し、ときには自然環境を改変してきた一方、自然環境の保護にも尽力してきた歴史を紹介しています。これはまさに保全と活用の両立であり、今日の世界で課題となっている“持続可能な開発”の先進モデルケースといえるのではないかと提起しています。

③秋吉台カルスト展示室 炭酸塩岩が雨水・土壌水により溶食作用を受け、地表及び地下で形成される特有の地形をカルスト地形といいます。秋吉台は国内最大級のカルスト台地といわれており、その特性を地形学・水文学的な視点から解説しています。創立時より現存する秋吉台模型、秋芳洞模型に最新の科学的知見を加え、懐古的であることのみが魅力とならないよう更新を続けています。階段周りの通路部は画廊をイメージし、片面にはカルストの特徴をとらえた写真10枚、向かい側に地質図や赤色立体地図など地図5枚を展示しています(写真4)。

④秋吉台の地質研究史展示室(2025年度整備予定) この展示室では120年を超える秋吉台での地質研究史を総合し、秋吉台の国際的価値とは何か、について紹介します。1970年頃から実施された帰水地域でのボーリングコアを象徴的な資料として展示室中央に公開する予定です。国内及び世界の石灰岩分布域とその特徴、山口県の地域地質、鉱物資源としての石灰石、大理石産業の歴史など、ここでも学際的な視点から秋吉台の価値と魅力に迫りたいと考えています。

⑤秋吉台の古生物展示室(2026年度整備予定) 秋吉台からはフズリナやサンゴに代表される後期古生代の浅海棲生物化石が豊富に産出することが知られていますが、カルストの裂罅堆積物にもまた多種多様な新生代脊椎動物化石が包含されます。秋吉台は、古生物学を学ぶ者にとっては非常に魅力的なフィールドといえるでしょう。この展示室はワンダーカンマー(Wunderkammer、驚異の部屋)をイメージし、館所蔵の様々な化石標本を所狭しと展示する計画です。

⑥秋吉台の生物展示室(2027年度整備予定) 秋吉台はカルストという特殊な環境系であることから、地下空間及び地上の草原環境で、それぞれに適応した生物が生息・生育しています。当館は特に洞窟性コウモリについて研究の歴史が長く、現生および化石種のコウモ



写真1 (左上) 小澤儀明博士の生涯と業績を紹介した展示コーナー。写真2 (左下) 各パネルの脇にはドイツ箱を用いた関連する話題をコラム的に紹介している。写真3 (中上) 松本達郎先生寄贈のアンモナイト化石。写真4 (右下) 秋吉台カルスト展示室。写真5 (右上) エントランスの銅像背面・基部・台座基部・左奥の柱には秋吉台産大理石が使用されている。

りについて詳しく紹介しています。

館内の壁面や巾木には秋吉台産の大理石銘柄が複数使用されており、明治～昭和期にこの地で栄えた大理石産産を学ぶ良い素材となっています (写真5)。

ここまで本館および屋外の展示について紹介してきましたが、来館者に「この博物館で一番の目玉展示は何か？」尋ねられた際は、常に「ここから見える秋吉台の風景です」とお答えしています。WEB上でさまざまな情報に触れることのできるバーチャルミュージアムが非常に重要であることにももちろん異論はありませんが、目の前に実物があること、視覚だけでなく五感全てで体感できるオンラインワンの非日常世界が実在することは、何物にも代えがたい価値であると考えています。

3. 普及教育活動

秋吉台科学博物館の普及教育活動として最初に挙げられるのは地元小・中・高等学校と連携したプログラムです。特に秋吉小学校では年間を通じ総合的な学習やクラブ活動として複数回の現地観察会、講義や体験活動を通じ地域の自然と文化を学びます。近隣の博物館施設や自然愛好団体と共催で観察会を開催するほか、依頼を受け博物館での講演または出前講義を行っています。毎春、山口大学理学部の新入生の多くは一日がかりの秋吉台巡検を体験します。小・中学校の修学旅行で希望があれば、化石採集体験等の研修を受け入れています。学芸員資格取得のための博物館実習も希望があれば受け入れています。

昨年リニューアルした散策路の解説板 (写真6) を活かしたクイズラリーやワークシート企画など、より良い体験プログラムを検討

中です。

4. 調査研究活動

2025年3月現在、2名の学芸員 (地学・生物各1名) が在籍しています。文部科学省指定研究機関ではない為機関番号及び研究者番号を取得できておらず、科研費申請ができない等の不利な環境にあります。幸いなことに、秋吉台をフィールドとして活動される多くの研究者の方々とご一緒させて頂くこともあり、独自研究とあわせて秋吉台での地道な研究活動を積み重ねています。今年度末の発行で60号を数える研究報告は、秋吉台地域の自然科学分野がテーマであれば投稿可能です。

5. 建設基本構想

創立より66年目を迎えた当館は建築物としての老朽化が著しく、狭小というだけでなく様々な問題が顕在化しています。段差が多くエレベーター等の設備が無いなどバリアフリーに非対応であること、今後発生が予測される自然災害への対策が出来ていないこと、施設内外においてインバウンド対応が不十分であること、などが挙げられます。折しも2023年4月より約70年ぶり単独改正となる改正博物館法が施行され、資料のデジタルアーカイブ化や地域諸団体との連携による文化観光活動の充実などが求められるようになりました。2025年度に世界ジオパーク登録を目指し申請を行うMine秋吉台ジオパークの主要な拠点施設としても、今後更なる博物館機能の充実が不可欠となります。これらのことから、2022年度より秋吉台科学博物館建設基本構想事業がスタートし、建て替えを前提とした協議を重ねています。秋吉台地域の学術的

価値、観光地としての更なる発展を見据え、近い将来の実現が見込まれます。

おわりに

当館では前述のような課題に加え、標本数が増加する一方で収蔵スペースが慢性的に不足している、タイプ標本を含む資料の適正な管理とデジタル化が十分に出来ていない、などの問題を抱えています。これらは全国の地方博物館に共通するものと考えられており、諸問題の改善・解決に向け様々な機関と連携を深めていく予定です。職員一同、弛まらず進化を続けて参ります。皆さまのご来館をお待ちしております。



写真6 草原上の散策路も博物館展示の一部であり26の解説板が設置されている。

CALENDAR

2025.4~

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共)共催、(後)後援、(協)協賛。

2025年

4月 April

★2025年度関東支部総会・講演会

4月12日(土) 14:00-16:45

場所: 北とびあ第2研修室(東京都北区王子)

講演会「潜水船・水中ドローンによる島弧海溝系の海底露頭観察」

講師: 山口飛鳥氏(東京大学大気海洋研究所)

支部総会委任状: 4月11日(金) 17時最終締切
<https://geosociety.jp/outline/content0201.html#2025sokai>

地質学史懇話会

4月13日(日) 14:00-17:00

場所: 早稲田奉仕園セミナーハウス101号室(新宿区西早稲田) ※ハイブリッド

Marianne Klemun(ウィーン大学歴史学元教授): 『Carl Diener and his trip to Japan in 1913』

問い合わせ先: 矢島道子pxi02070[at]nifty.com

5月 May

IUGS - Initiative on Forensic Geology Conference

(IUGS地質学イニシアチブ会議)

5月21日(水) ~23日(金)

会場: Spazio Europe(イタリア ローマ市)

<https://www.iugs-ifg2025.com/>

シンポジウム 海洋地質学の50年、そしてこれから

5月24日(土) 13:30-17:00(ハイブリッドで配信予定)

場所: 東京大学本郷キャンパス伊藤国際謝恩ホール

懇親会(徳山英一先生を偲ぶ会・定員250名): 17:00-19:00

※懇親会参加申込・参加費振込締切: 4/25(金) 24:00

※シンポジウム参加無料。懇親会参加費10,000円

<https://aori-u-tokyo.jimdosite.com/>

日本地球惑星科学連合2025年大会

5月25日(日) ~30日(金)

会場: 幕張メッセ(千葉県美浜区) + オンライン開催

https://www.jpogu.org/meeting_j2025/

6月 June

地質学史懇話会例会

6月8日(土) 13:30~17:00

場所: 北とびあ 803号室(東京都北区王子)

・加藤茂生:(仮題) 最初期の東京地学協会
・会田信行: 『最新地学事典』の中の地球科学史

石油技術協会2025年度春季講演会

6月11日(水) ~12日(木)

場所: 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター

<https://www.japt.org/>

★2025年中部支部年会

6月21日(土) ~22日(日)

会場: 静岡大学静岡キャンパス

巡検『瀬戸川帯南部の超塩基性-塩基性岩類の産状』6月22日

<https://geosociety.jp/outline/content0019.html#2025nenkai>

日本古生物学会2025年年会

6月27日(金) ~29日(日)

会場: 北海道大学(札幌市北区)

<https://www.palaeo-soc-japan.jp/>

7月 July

(後) 第62回アイソトープ・放射線研究発表会

7月2日(水) ~4日(金)

会場 日本科学未来館 7階 未来館ホールほか(東京・お台場)

<https://pub.conf.it.atlas.jp/ja/event/jrias2025>

8月 August

科学教育研究協議会2025年第71会大会

8月8日(金) ~10日(日)

会場: 中央大学附属高等学校(東京都小金井市)

9月 September

第10回ぼうさいこくたい2025 in 新潟

9月6日(土) ~7日(日)

場所: 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター

<https://bosai-kokutai.jp/2025/>

★日本地質学会第132年学術大会(2025熊本大会)

9月14日(日) ~16日(火)

会場: 熊本大学黒髪地区

10月 October

2025年度日本火山学会秋季大会

10月1日(水) ~3日(金)

会場: キッセイ文化ホール(予定)(長野県松本市水波)

<http://www.kazan-g.sakura.ne.jp/J/index.html>

2025 NEA IDKM Symposium

主催: OECD/NEA(ホスト機関: NUMO)

10月7日(火) ~9日(木)

会場: パシフィコ横浜

サイトツアー(10/10): 東京電力廃炉資料館、福島第一原子力発電所(予定)

参加登録の締切: 2025年8月(予定)

<https://geosociety.jp/outline/content0255.html#10>

Magellan Plusワークショップ: Land-to-Sea Shaking Studies (L2S3-WS) Unlocking the full potential of subaqueous paleoseismology at active plate boundaries

(海底・湖底堆積物を用いた地震履歴研究に関するワークショップ)

10月21日(火) ~24日(金)

場所: 国立台湾大学(台湾・台北市)

主催: L2S3-WS国際実行委員会

国内問い合わせ先: 池原 研(産総研), 中西 諒(京都大学)

<https://sites.google.com/view/land2seaworkshop/home>

11月 November

国際 Gondwana 研究連合 (IAGR)

2025年総会

及び第22回 Gondwana からアジア 国際シンポジウム

11月2日(日) ~6日(木)

会場: 延世大学新村キャンパス(韓国・ソウル)

2日: 参加登録とアイスブレイカー

3日・4日: シンポジウム, 総会, 晩餐会

5日・6日: 野外討論会

参加登録・発表要旨締切: 4月30日(水)

1st circular: www.gondwanainst.org/symposium/Symposiums-index.htm

(協) Techno-Ocean 2025

11月27日(木) ~29日(土)

会場: 神戸国際展示場2号館ほか(神戸市中央区港島中町6-11-1)

<https://to2025.techno-ocean.com/>

★フォトコンテスト作品展示会

第16回惑星地球フォトコンテストほか入選作品展示会

日程：2025年5月13日（火）午後～25日（日）14:00頃まで
場所：東京パークスギャラリー（上野グリーンサロン内）（台東区上野公園 JR上野駅 公園改札出てすぐ）
入場無料、どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。
入選作品の画像や講評は近日学会HPに掲載予定です。
問い合わせ先：日本地質学会事務局 main@geosociety.jp

★オンライン一般講演会

ナウマン来日150年。その功績と足跡を辿る

日時：2025年5月10日（土）13:30～16:00（予定）
*YouTube Liveによる配信を予定
講演会：矢島道子氏「ナウマンの生涯と日本での業績について」（仮題）
ナウマンゆかりの地（3か所）から中継し、彼の足跡を紹介予定
*決まり次第、詳細を学会HPで公開いたします。

★街中ジオ散歩in Chiba

身近な地形・地質から探る稲毛海岸の歴史

主催：（一社）日本地質学会、（一社）日本応用地質学会
日時：2025年5月11日（日）10:00～13:00ごろ（予定）
見学場所：千葉県千葉市美浜区～稲毛区
主な見学地点は以下となります。
「海洋公民館跡地（こじま公園）」～「旧納涼台」～「漁協解散の記念碑・民間航空発祥之地モニュメント」～「一の鳥居（稲毛浅間神社）」～「稲毛浅間神社」～「稲毛公園」～「稲毛陸橋と海食崖」
案内者：山中 蛭氏、白井 豊氏、高橋直樹氏（千葉県立中央博物館）
集合及び解散場所・時間：
集合：JR京葉線 稲毛海岸駅南口（人のモニュメント前）
出発：10:00（受付は集合地点で9:45～10:00）
解散：最終見学地点（JR稲毛駅、京成稲毛駅へ徒歩）13:00ごろ（予定）
会費：大人1,500円、小中学生500円（保険代含む、小中学生は保護者同伴）
募集人員：20名（定員を超えた場合は、締切後抽選）
募集期間：4月1日（火）～15日（火）
対象：参加資格は特にありませんが、急坂、階段を含む高低差のある箇所があります。

申込に際しての注意事項（申し込みフォームは4月上旬にHP掲載予定）：
①雨天中止、小雨決行とします。
②当見学会では、途中昼食時間を設けておりません。昼食は解散後各自でお願いします。
③連絡はメールにて行います。メールでの連絡ができない場合

は、申し込みをご遠慮下さい。

- ④一般（非会員）の方を対象とした行事なため、一般申込者を優先とさせていただきます。
- ⑤申込時には保険加入や名簿作成のために必要な情報をお知らせいただきます。
- ⑥申込項目には漏れなく記入して下さい。記入いただけない場合は、受け付けできません。
- ⑦中学生以下の方は保護者同伴でお申し込み下さい（保護者の分も別途申込手続きを行って下さい）。
- ⑧お申し込みいただいた方は上記事項に同意していただけましたものとみなします。

申込方法：上記注意事項をよくご確認のうえ、
WEB専用申込フォーム（<https://forms.gle/jRWqm399cRYh4MR6A>）から

お申し込み下さい（電話では受け付けません）。
（注）抽選の場合、当選の発表は、4月中旬にメールにて連絡させていただきます。

問い合わせ先（メールにてお願いします）：

日本地質学会関東支部（担当 細矢）
mail：hosoya@ckcnet.co.jp

★近畿支部

第42回地球科学講演会「地質の日」協賛行事 「関西で考えるべき活断層地震の揺れ」

関西の中心部である大阪平野、京都・奈良盆地などは平野と丘陵（山地）の境に活断層が潜んでいます。長い年月の活断層の動きによってこういった地形ができていると言った方が良いかも知れません。平野や盆地は生活に便利な地形であるが故に人間は現代社会を造ってきました。数千年に1度牙を剥く活断層による地震の揺れにはどういった特徴があるのでしょうか？またその謎解きのためにどういった調査や分析をしているのでしょうか？1995年兵庫県南部地震や2016年熊本地震、2018年大阪府北部の地震、2024年能登半島地震などの教訓を踏まえて将来の地震の揺れについて説明します。

日時：2025年（令和7年）5月10日（土）14:00～16:00

場所：大阪市立自然史博物館講堂（YouTubeでの配信も行います）

講師：岩田知孝氏（京都大学名誉教授）

主催：地学団体研究会大阪支部・日本地質学会近畿支部・大阪市立自然史博物館

対象：講堂での聴講：どなたでも参加できます。

YouTube配信：インターネットに接続できる方。

講堂での聴講の定員：170名（定員を超えた場合は抽選）。要申込み。

参加費：無料。ただし博物館講堂での聴講の場合は博物館入館料が必要。

申し込み：自然史博物館ホームページから申し込みます。往復はがき、または電子メール（gyouji@omnh.jp）の場合は、行事名（地球科学講演会）、参加希望者全員の氏名と年齢（学年）、住所、電話番号および返信用宛名を記入の上、4月25日（金）までに博物館普及係までお申し込み下さい。抽選結果、参加方法は返信でお知らせします。

※YouTube配信での聴講は、申込不要。

その他：YouTubeでの視聴方法：YouTubeの「大阪市立自然史博物館」チャンネル (<https://www.youtube.com/c/大阪市立自然史博物館/>) にアクセスして表題の番組をクリック、開始時間になれば始まります。見逃し配信は6月10日（火）まで。

★日本地質学会後援

一般公開講座「海底に眠る南下浦断層」

三浦半島活断層調査会創立30周年記念
三浦半島活断層調査会では三浦半島活断層群の踏査を幾度か実施しております。今回の目玉は、大潮の干潮時の海底に現れる活断層帯の露頭にあります。当日は、大潮の干潮で朝11時の潮位は-3cmと低いので400mまで断層が確認できると思います。その後、海岸から南下浦中学校まで300m程失われた露頭の確認をします。午後はトレンチ調査跡、断層地形の見学、三崎口駅周辺の開発と活断層について考えます。

主催：三浦半島活断層調査会
後援：日本地質学会、三浦市、横須賀市教育委員会

日時：2025年4月29日（火・祝）小雨決行

集合場所：高抜バス停（京急三浦海岸駅よりバスで約10分、バス停4つ）：三浦海岸駅発・剣崎行8:23または三崎東同行8:45（金田経由）

集合時間：9:00（解散は15:00頃予定）

現地調査コース：高抜バス停～金田湾（海底の活断層）～県道215号脇（失われた露頭1）～高抜バス停横の農道（失われた露頭2）～南下浦中学校給食棟裏露頭～菊名丘陵地（三崎面の変形）～神台（トレンチ調査跡）～飯森（断層崖）～三崎口駅下～（三崎口高架下の露頭と開発）

注意事項：履きなれた靴でご参加を。弁当・飲み物・雨具は各自持参。

申し込み：E-mailまたは往復葉書にて住所・氏名・電話番号をご記入の上、**4月20日までに**下記の連絡先までお申込みください。（申し込みの受付は先着30名迄とします。）

参加費用：500円（資料代+保険料）

問い合わせ・申込先：三浦半島活断層調査会 事務局（青木厚美方）

鎌倉市大船4-21-5-603

電話：080-1193-5179, メール：atsumi-aoki@mcko.jp

事務局からのお願い：会員情報に変更があった場合は、,,

自宅や勤務先等登録内容にご変更があった場合は、速やかに情報の更新をお願い致します。毎月の会誌や大切な郵便物が届かなくなってしまう。

情報の変更は、学会ホームページ「会員のページ」にログイン（ID:会員番号、7桁の数字です）すると、ご自身で登録内容を更新することができます。もしくは学会事務局までご連絡ください。ご協力をよろしくお願い致します。

問い合わせ：日本地質学会事務局 メール：main@geosociety.jp
電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

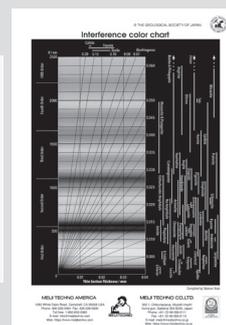
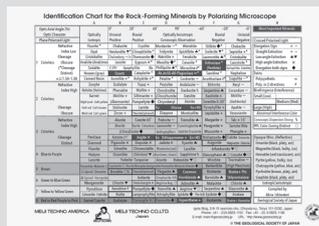


下敷き—干渉色図表・偏光顕微鏡による鉱物鑑定表—

岩石学を学習する学生さんをはじめ、偏光顕微鏡を使用する全ての方々へ、ぜひ活用ください。

プラスチック製、A4版、両面カラー、英語版

定価 **400円**（会員頒価 **300円**）（税込）



20枚以上お買い求めの場合 30%OFF!! 公費払いにも対応いたします

ご注文は学会事務局まで（TEL03-5823-1150/main@geosociety.jp）

2. 旧石器人の航海と黒潮の影響

(1) 舟 旧石器人が用いた舟は、草束舟、竹筏舟、丸木舟による実験航海¹⁹⁾の結果より丸木舟と考えられる。なお、フィリピンや台湾から漂流して琉球列島に生存してたどり着く可能性は極めて小さいことが漂流ブイの実験から示されている²⁰⁾。

(2) 海上距離 琉球列島の島間の海上距離は海図と国土地理院ウェブサイト「地理院地図」の距離機能を併用し、台湾・与那国島間と大陸・魚釣島間などの海上距離はスケールで計測し、フィリピン・琉球列島間の海上距離は国土地理院ウェブサイト「測量計算（距離と方位角の計算）」を用いた。（表2、表3）

(3) 航海の条件と限界 旧石器時代に丸木舟による航海を行うには舟の上あるいは島の高所から目指す島が見えることが必要で、見えない島は島があることが分からないので航海は行わなかったと考えた。航海は、舟の上から目指す島を見ながら舟がそこに向かって進むように漕ぎ、舟の上から目指す島が見えないときは出航した島や天体、風向などから目指す島の方向の見当をつけて漕いだと考えられる。

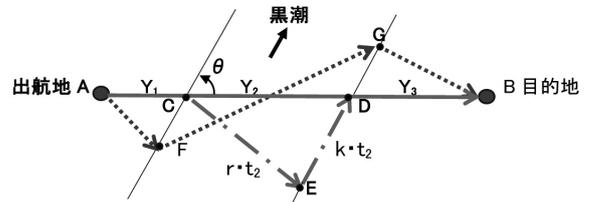
島が見えるかどうかは、文献²¹⁾と同様な方法で検討した。その結果を表2、表3の「L」と「可視」に示す。海水準が低下すると海面からの島の高さは高くなり遠くから見えるようになるが、4万年前の「古久米島」と「古宮古曾根島」の間は、お互いに島の最高点や出航した島が見える範囲内の海上の舟からでも相手の島は見えない。2万年前の「古沖繩・久米島」と「古西大九曾根島」の間は、お互いに島の最高点から相手の島は見えないが、出航した島が見える範囲内の海上で相手の島が見える所がある。

丸木舟を「漕いで進む速度」は、2019年に行われた台湾から与那国島への実験航海¹⁹⁾の結果から3.7km/hr（3.9km/hrと3.5km/hr²¹⁾の平均）とした。実験航海では2日目午後から休憩の頻度が目立ち、出航して45hr10min後（途中約8hrの睡眠休憩）に与那国島に到達している¹⁹⁾。また、復元された古代ポリネシア式カヌーを10人の乗組員が漕いで走行実験では、屈強なクルーが漕いでも2日間で体力が限界だった²²⁾。これらより、平均速度3.7km/hrで漕ぎ続けることができる限界時間は48hrとした。黒潮が流れていない海域での航海距離の限界は177kmとなる。

(4) 航海への黒潮の影響 旧石器人が琉球列島に向けて出航した所は、九州、大陸、台湾（大陸とつながっていた）、フィリピンが考えられる。これらの所から琉球列島へ到達するには、全て黒潮を横断しなければならぬ。黒潮を横断する航海は、黒潮の流れを受ける舟が黒潮に流されることなく目指す島に進むように、出航した島と目指す島の線上に舟が居ることを確認しながら、目指す島より黒潮の上流側に船先を向けて漕いだと考えられる。

図-3において黒潮区間外のAを出航し黒潮区間CDを横断して黒潮区間外の目的地Bに行くときの航海時間Tは、同図の式で求めることができる。なお、Aから目的地Bにまっすぐ進まず、図-3の点線のようにAからFに進み、Fから黒潮区間を黒潮の流れに沿ってGに進んで目的地Bに行くと、AからBに向かってまっすぐ進むときより航海時間Tが短くなる場合がある。しかし、旧石器人が初めて黒潮を横断して琉球列島の島へ航海したときに、このようなルートをとったとは思えない。

(5) 4万年前の琉球列島への航海 4万年前の黒潮横断航海について、出航地と目的地、距離 $Y_1 \sim Y_3$ 、黒潮の流向 θ を表3のように推定し、目指す島が見えるかを検討した。また、「漕いで進む速度」 r が3.7km/hr、黒潮速度 k が2~4km/hrのときの航海時間Tを図-3の式で求め、Tが48hr以内となる黒潮速度 k を検討した。トカラ海峡の黒潮横断は、海上距離が最も長い屋久島から口之島を対象とし、この区間の黒潮は現在と同様に東（ θ



出航地 A から黒潮区間(CD)を横断して目的地 B に舟がまっすぐ進む場合を考え、AC 間の距離を Y_1 、CD 間の距離を Y_2 、DB 間の距離を Y_3 、舟が進む方向に対して黒潮が流れる角度を θ ($0^\circ < \theta < 180^\circ$)、AC 間の航海時間を t_1 、CD 間の航海時間を t_2 、DB 間の航海時間を t_3 、「漕いで進む速度」を r 、黒潮の速度を k とする。

黒潮区間内を漕いで進む距離は $r \cdot t_2$ 、黒潮が運ぶ距離は $k \cdot t_2$ (図の一点鎖線 CE, ED)。

ピタゴラスの定理より、三角形 CDE において、

$$(r \cdot t_2)^2 = (k \cdot t_2 \cdot \sin \theta)^2 + (Y_2 - k \cdot t_2 \cdot \cos \theta)^2 \quad (3)$$

$$\therefore t_2 = Y_2 [r^2 - k^2 \cdot \sin^2 \theta]^{1/2} - k \cdot \cos \theta / (r^2 - k^2) \quad (4)$$

$$\text{ただし } r = k \text{ のときは, } t_2 = Y_2 / (2k \cdot \cos \theta) \quad (5)$$

$$\text{また, } r > k \cdot \sin \theta \quad (6)$$

$$\text{逆潮の時は, } r > k \quad (7)$$

A から目的地 B までの航海時間 T は、

$$T = t_1 + t_2 + t_3 \quad (8)$$

$$t_1 = Y_1 / r, \quad t_3 = Y_3 / r \quad (9)$$

θ と r が一定の場合、 $r \cdot t_2$ が最小(すなわち、黒潮横断時間 t_2 が最小)となるのは、 $k = r / \tan \theta$ のときで、

$k < r / \tan \theta$ では k が大きいほど t_2 は短く、

$k > r / \tan \theta$ では k が大きいほど t_2 は長くなる。

図-3 黒潮横断航海（概念図）

=145°) と南東 ($\theta=105^\circ$) の間を移動していたと考えた。

検討結果を表3に示す。屋久島から口之島への航海は、逆潮であるが、屋久島から口之島が見え、航海時間Tが48hr以内のときがあるので、航海が可能なきが合ったと考えられる。大正島から「古久米島」や「古宮古島」、魚釣島から「古宮古島」への航海は、目指す島が見えないので航海は行わなかったと考えられる。魚釣島から「古八重山島」への航海は可能なきが合ったと考えられる。大陸やその周辺の島の海岸線は定かではないが、大陸と魚釣島の間は遠く広いので見えずこの間の航海は行わなかった可能性が高いと推測した。台湾（蘇澳）から与那国島への航海は可能なきがある。なお、蘇澳周辺では、当時は海面からの高さ170m以上の所で与那国島が見えたので、この付近の旧石器人は海の向こうに島があることをよく知っていたと考えられる。フィリピン（イトバヤット島、図-1）から

表-3 4万年前の琉球列島への黒潮横断航海

出航地	目的地	Y ₁ (Km)	Y ₂ (Km)	Y ₃ (Km)	Y (Km)	θ (°)	可視	L (Km)		k (Km/hr)
								前	後	
屋久島	口之島	0	53	0	53	145 105	○	106	176	2.7 以下 3.2 以下
	古久米島	0	124	93	217	40	★	79	48	2.9 以上
大正島	古宮古島	0	80	43	123	85	★	58	48	3.1 以上
	古宮古島	0	113	66	179	45	★	58	78	4.0 以下
魚釣島	古八重山島	0	85	58	143	70	△	98	78	3.6 以下
	台湾	与那国島	42	66	0	108	85	△	72	142
フィリピン	波照間島	24	124	259	407	40	★	49	77	X
	与那国島	31	384	0	415	*	★	72	77	X

・Y=Y₁+Y₂+Y₃。「L」の「前」は海上の舟から目指す島が見える最大距離、「後」は舟から出航した島が見える最大距離

2023年度卒業生・修了生対象

地質系若手人材動向調査報告

2025年2月28日

一般社団法人日本地質学会 地質技術者教育委員会

1. はじめに

4年間継続して地質系若手人材動向調査を行った。この調査により、全国の地質系の高等教育を受けた学生のうちが毎年何名が大学を卒業あるいは大学院を修了しているのか、その卒業生や修了生はどのような分野に就職もしくは進学しているのかというデータが得られ、これらのデータはこの分野の大学などの教育機関や実社会での企業や研究機関にとって極めて重要な指標である。

すなわち、全国の地質系大学がどれくらいの学生を高等学校に求めているのか、いわゆる地質系業界には何名が就職しているのか、それは十分な人材数といえるのかなど、いろいろな検討に資することができる。

そのため、日本地質学会の坂口有人執行理事の発案で2017年度に日本地質学会と全国20大学地球科学系学科長会議が協力して、全国の若手人材動向調査が行われた。このような調査は継続的なデータを蓄積することが重要であるので、2020年度から継続的にアンケート調査を行っている。

協力してくださった大学の学会員各位に、この紙面を借りて深く感謝申し上げる次第である。

2. 調査方法

40を超える全国の地質系の大学に所属する学会員に行ったアンケートは主に以下の内容である。

- ①当該学科あるいは研究科内で学部を卒業あるいは大学院を修了した学生の数
- ②卒業・修了者の就職あるいは進学の内訳
- ③就職者の分野の内訳（「土木・建築」「資源・素材」「教員（中・高）」「研究職」「その他分野」）
- ④日本地質学会が開催した「地質系業界説明会」に参加した、あるいは本学会発行の「キャリアビジョン誌」をみて、専門職に就職した学生の数

研究分野における分野融合が進む昨今において、地質系学生を一義的に定義することは難しいので、今回のアンケート調査の対象となる地質系学生の選定については、各大学に委ねた。また、就職先区分への振り分けも各大学の判断に従った。

3. 調査結果

今回調査した2023年度の結果は、2020年度から2022年度のそれとあわせて、4年間分のデータとして図1および表1に示す。なお、2023年度の以下のデータについては、当学会HPの会員ページに収録した。

- ・アンケート依頼先の大学一覧
- ・回答のあった各大学における卒業・修了者数、就職先区分などの一覧

なお、過去3年間のデータは以下に収録しているので、参照されたい。

- ・2022年度調査結果：地質学会ニュース誌 2024年1月号 p 14-16
https://geosociety.jp/uploads/fckeditor/NEWS_BN/2024-01.pdf
- ・2021年度調査結果：地質学会ニュース誌 2022年12月号 p 14-15
https://geosociety.jp/uploads/fckeditor/NEWS_BN/2022-12

pdf

・2020年度調査結果：地質学会ニュース誌 2021年11月号 p 18-19

https://geosociety.jp/uploads/fckeditor/NEWS_BN/2021-11.pdf

卒業・修了者の総数は、2023年度は706名（22大学）であり、2020～2022年度が概ね1,000名（30～41大学）であったのに対し7割程度の回収率であった。これまでも、各大学の事情により回答がなかったあるいは対象年度全てに回答されなかったことや学科定員に満たないデータがあったが、2023年度はとくに回収率が低下した。今後、各大学のご協力をさらに得ることができるよう検討をおこないたい。

①卒業・修了者の就職あるいは進学の内訳

2023年度は、706名の卒業・修了者の61.8%に当たる436名が就職し、270名が進学している。2020～2022年度の3年間の就職者の割合は59.9～62.5%であり、回答率が低下した2023年度も同様の傾向にある。

②就職者の分野の内訳

就職先を「土木・建築」「資源・素材」「教員（中・高）」「研究職」「その他分野」の5つに分けて回答してもらい、「その他分野」を除く4分野を地質系の卒業・修了者の「専門就職」先であると定義した。

なお、大学によっては区分について注釈を加えており、その内容を勘案して区分を修正することもあった。

2023年度では436名の就職者のうち44.3%に当たる193名が専門就職している。2020～2022年度の3年間の専門就職者の割合は39.9～48.4%であり、回答率が低下した2023年度も同様の傾向にある。すなわち、就職者の4割程度が専門就職していることになる。

専門就職の細分を見ると、

- ・2023年度：「土木・建築」109名（56.5%）、「資源・素材」30名（15.5%）、「教員（中・高）」22名（11.4%）、「研究職」32名（16.6%）
- ・2022年度：「土木・建築」153名（56.7%）、「資源・素材」49名（18.1%）、「教員（中・高）」25名（9.3%）、「研究職」43名（15.9%）
- ・2021年度：「土木・建築」183名（61.2%）、「資源・素材」52名（17.4%）、「教員（中・高）」12名（4.0%）、「研究職」52名（17.4%）
- ・2020年度：「土木・建築」169名（62.1%）、「資源・素材」45名（16.5%）、「教員（中・高）」20名（7.4%）、「研究職」38名（14.0%）

となり、4年間の就職先の比率は概ね同様であり、およそ6割が「土木・建築」分野に就職していることがわかる。

一方、「研究職」には14.0～17.4%が就いており、その就職比率は、博士が最も多く52.6～71.1%を占め、続いて修士が11.3～47.4%となっている。学士は0～18.6%の比率である。

「教員（中・高）」は4.0～11.4%と少ない状況である。その就職比率は、学士が最も多くて「教員（中・高）」の55.0～66.2%を占め、続いて修士が32.0～40.0%となっている。博士は2020および2022年度にそれぞれ1名（4.0～5.0%）の就職実績がある。

③専門業界への就職動向

専門就職者のうち、「土木・建築」「資源・素材」の2分野を実業界での専門就職と捉え「専門業界」と呼称する。専門業界

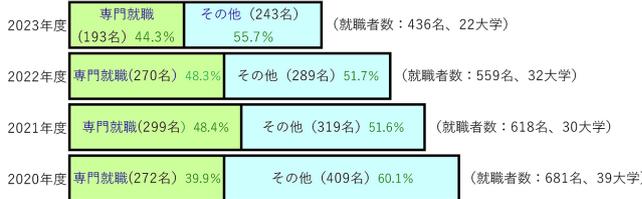
人材動向調査

●卒業・修了者のうち就職者数 ※2023年度は回答数が少ないが、内訳の割合は概ね同じ。



●就職者のうち専門就職（「土木・建築」「資源・素材」「教員（中・高）」「研究職」）者数

※2023年度は回答数が少ないが、内訳の割合は概ね同じ。



●専門就職者の業種内訳と学位区分 このうち専門業界は「土木・建築」「資源・素材」

※2023年度は回答数が少ないが、内訳の割合は概ね同じ。



●専門就職者（「土木・建築」「資源・素材」「教員（中・高）」「研究職」）数の大学・別の状況（上位10校）

（大学名の後の数字は専門就職者数、「大学」を省略） ※2023年度は回答数が少ないが、傾向は概ね同じ。



●専門業界就職者（「土木・建築」「資源・素材」）数の大学別の状況（上位10校）

（大学名の後の数字は専門業界就職者数、「大学」を省略） ※2023年度は回答数が少ないが、傾向は概ね同じ。



■地質系 JABEE校8校(2022年度末現在)、JABEE校7校(2021年度末現在)、JABEE校8校(2020年度末現在)
 ■地質系 元JABEE校3校(2022、2021年度末現在)、元JABEE校2校(2020年度末現在)

※地球・資源分野のJABEE校には、上記以外にアンケートを実施していない資源系JABEE校1校がある。

【参考】2022年度調査結果：地質学会ニュース誌 2024年1月号 p14-16 https://geosociety.jp/uploads/fckeditor/NEWS_BN/2024-01.pdf
 【参考】2021年度調査結果：地質学会ニュース誌 2022年12月号 p14-15 https://geosociety.jp/uploads/fckeditor/NEWS_BN/2022-12.pdf
 【参考】2020年度調査結果：地質学会ニュース誌 2021年11月号 p18-19 https://geosociety.jp/uploads/fckeditor/NEWS_BN/2021-11.pdf

図1 2020～2023年度4年間の卒業生・修了生対象 地質系若手人材動向調査結果 ～とくに専門職、専門業界への就職動向を探る～
 2025年2月 日本地質学会

表1 2020から2023年度卒業生・修了生対象 地質系若手人材動向調査結果 まとめ

機関名	学位	人数	専門就職者数	専門業界就職者数	就職者数(分野別内訳)					進学者数
					土木・建築	資源・素材	教員(中・高)	研究職	その他	
2023年度 回答数：22大学	学士	457	75	59	56	3	14	2	155	227
	修士	220	96	78	52	26	8	10	81	43
	博士	29	22	2	1	1	0	20	7	
	計	706	193	139	109	30	22	32	243	270
2022年度 回答数：32大学	学士	631	120	96	87	9	16	8	197	314
	修士	260	119	102	66	36	8	9	80	61
	博士	43	31	4	0	4	1	26	12	
	計	934	270	202	153	49	25	43	289	375
2021年度 回答数：30大学	学士	685	135	121	111	10	8	6	220	330
	修士	250	123	110	72	38	4	9	86	41
	博士	54	41	4	0	4	0	37	13	
	計	989	299	235	183	52	12	52	319	371
2020年度 回答数：41大学	学士	745	117	106	88	18	11	0	263	365
	修士	323	130	104	79	25	8	18	137	56
	博士	34	25	4	2	2	1	20	9	
	計	1102	272	214	169	45	20	38	409	421

機関名	学位	人数	専門就職者率	専門業界就職者率	就職者比率(分野別内訳)					進学比率
					土木・建築	資源・素材	教員(中・高)	研究職	その他	
2023年度 回答数：22大学	学士	631	16%	13%	12%	1%	3%	0%	34%	50%
	修士	260	44%	35%	24%	12%	4%	5%	37%	20%
	博士	43	76%	7%	3%	3%	0%	69%	24%	
	計	934	27%	55%	15%	4%	3%	5%	34%	38%
2022年度 回答数：32大学	学士	631	19%	15%	14%	1%	3%	1%	31%	50%
	修士	260	46%	39%	25%	14%	3%	3%	31%	23%
	博士	43	72%	9%	0%	9%	2%	60%	28%	
	計	934	29%	64%	16%	5%	3%	5%	31%	40%
2021年度 回答数：30大学	学士	685	20%	18%	16%	1%	1%	1%	32%	48%
	修士	250	49%	44%	29%	15%	2%	4%	34%	16%
	博士	54	76%	7%	0%	7%	0%	69%	24%	
	計	989	30%	69%	19%	5%	1%	5%	32%	38%
2020年度 回答数：41大学	学士	745	16%	14%	12%	2%	1%	0%	35%	49%
	修士	323	40%	32%	24%	8%	2%	6%	42%	17%
	博士	34	74%	12%	6%	6%	3%	59%	26%	
	計	1102	25%	58%	15%	4%	2%	3%	37%	38%

の多くは「土木・建築」分野で、地質調査業や地質・建設コンサルタント業が大半を占めると考えられる。

2023年度では436名の就職者のうち31.9%に当たる139名が、「土木・建築」「資源・素材」の2分野の専門業界に就職している。2020～2022年度の3年間の専門業界就職者の割合は31.4～38.0%であり、回答率が低下した2023年度も同様の傾向にある。4年間で平均すると就職者のおよそ3分の1が専門業界に就職していることになる。

これら専門業界への就職比率は、学士は42.4～51.5%、修士は45.8～56.1%であり、修士がわずかに多い。博士はいずれの年度も1～2%を占めるに過ぎない。

④専門就職者を多く輩出している大学

「土木・建築」「資源・素材」「教員(中・高)」「研究職」で示される専門分野に、2020～2023年度の4年間に多くの人材を輩出している大学は、島根大学(117名)、日本大学(84名)、山口大学(76名)、東京大学(70名)、新潟大学(48名)であり、信州大学(40名以上)、筑波大学(30名以上)が続く。

専門就職の細目をみると、2名以上輩出している大学は2023年度では以下のとおりである。

「土木・建築」：島根大学(26名)、日本大学(18名)、山口大学(12名)、新潟大学・信州大学(7名)、富山大学(6名)、山形大学・大阪公大・愛媛大学(5名)、熊本大学(3名)、筑波大学・広島大学(2名)

「資源・素材」：信州大学・富山大学・広島大学(4名)、新潟大学・名古屋大学・京都大学・福岡大学(3名)

「教員(中・高)」：日本大学・山口大学(3名)、富山大学・岡山大学・島根大学(2名)

「研究職」：東京大学(11名)、岡山大学(6名)、名古屋大学(4名)、愛媛大学(3名)、筑波大学・大阪公大(2名)

⑤専門業界に多く人材を輩出している大学

「土木・建築」「資源・素材」で示される専門業界に、2020～2023年度の上位10校として4年間連続で人材を輩出している大学は、島根大学(106名)、日本大学(73名)、山口大学(67名)、信州大学(45名)および新潟大学(41名)の5大学である。

また、4年間連続上位10校ではないが、20名前後を輩出している大学は、山形大学、東北大学、千葉大学、富山大学、岡山理科大学、高知大学の7大学である。

これら12大学のうち、島根大学、日本大学、山口大学、新潟大学、千葉大学および富山大学の6大学は、JABEE(一般社団法人日本技術者教育認定機構)の認定プログラムを有しており、信州大学および山形大学の2大学はかつてJABEEの認定プログラムを運用していた。すなわち、専門業界への輩出数が多い12大学のうち、8大学がJABEE認定プログラムに関係する大学である。また、各年度の上位10校の半数以上をJABEE認定プログラムに関係する大学が占めている。これらのことから、JABEEは専門業界での技術者教育の点で極めて効果的な教育プログラムであるといえる。

⑥研究職を多く輩出している大学

2020～2023年度の4年間に5名以上の「研究職」を輩出している大学は、4年間連続では東京大学(50名)であり、4年間全てに回答がなかった大学を含め、筑波大学(16名)、岡山大学(12名)、東北大学・広島大学(7名)、日本大学・名古屋大学(6名)、京都大学・愛媛大学(5名)である。なお、2022年度調査結果での人数記載に誤りがあり、今回訂正して新たな合計人数を記している。

東京大学は群を抜いて輩出者数が多く、4年間の研究職合計165名の30.3%を占める。

⑦専門業界への就職に対する「地質系業界説明会」や「キャリアビジョン誌」の効果

今回の調査では、本学会が開催した「地質系業界説明会」に

参加した、あるいは本学会発行の「キャリアビジョン誌」をみて、専門職である専門業界に就職した学生の人数についてもアンケートを行った。

回答のあった22大学では、「対象学生が存在する：5大学」、「対象学生は存在しない：2大学」、「対象学生の存在は不明：15大学」であった。

存在すると回答した5大学の対象学生の合計はおおよそ30名であり、専門業界就職者139名の約22%に当たる。

32大学から回答のあった2022年度の結果では、「対象学生が存在する：4大学」、「対象学生は存在しない：5大学」、「対象学生の存在は不明および無回答：23大学」であった。存在すると回答した4大学の対象学生の合計はおおよそ20名であり、専門業界就職者202名の約10%に当たる。

2023年度調査で回答のあった22大学の約68%に当たる15大学では、対象学生の存在は不明であり、専門業界への就職に対する「地質系業界説明会」や「キャリアビジョン誌」の効果については言及したが、対象学生の存在を回答した大学は2022年度の4（比率約13%）から2023年度は5（比率約23%）と増え、専門業界就職者比率も2022年度の約10%から2023年度は約22%と増加している。

今後は、「地質系業界説明会」や「キャリアビジョン誌」についてさらに周知を行い、各大学で活用してもらおうようにしてから、効果の検証を続けたい。

⑧大学教育の立場から日本地質学会に対する要望など

アンケートでは上記についても意見を求めた。回答した22大学中約4割にあたる9大学からご意見をいただいた。いずれも貴重なご意見であり、原文のまま下記に列記する（順不同）。これらは今後のアンケート調査を進めるうえで参考にさせていただく。

- ・地球科学系教室の教員数維持も難しくなっています。サポートをお願いします。
- ・高校生以下への啓発を一層強化する必要がある。今年度新入生には将来の進路として「地質コンサル」と述べるような学生もいて、地質学会が高校等へ配布しているリーフレットにも一定の成果が表れつつあるように感じている。
- ・様々な就職支援をしていただき感謝しております。
- ・本アンケートでの各就職先の項目が明確ではないと思います。大学ごと（入力者ごと）で、認識が異なるのではないのでしょうか。
- ・本学卒業生は、電力関連企業への就職も多いのですが、この業界は土木建設系でもなければ資源・素材系でもありません。初めのいくつかの質問で聞かれている就職先業種が実際の就職先と乖離しているように思います。地質関連の学生はもっと広い業界で必要とされている印象です。
- ・大変役に立っています。私立は、教員数の補充が難しい状況です。遠隔の基礎講座等開いて頂けたら助かります。
- ・ご苦労様です。手持ちのデータでお答えしましたが、就職先の登録をしていない学生もおり少し不正確になっています。
- ・本アンケートに関してですが、本学には気象・水文学など多様な分野があり、それぞれの専門に合致する会社にも就職しています。また、気象庁などへも就職していますので、本アンケートに、「その他の専門分野企業」「専門官公庁機関」などの選択肢を入れていただくと幸いです。そうでないと、彼らは「その他」に一括されてしまいます。よろしく申し上げます。
- ・本学では地質系教員の数ももう少なく、もう就職関連のアンケート等に回答するのはデータとして意味がないと感じています。

4. まとめと課題

2023年度の就職動向調査によると、706名の卒業・修了生の約62%が就職し、地質系の専門職分野には卒業・修了生の約20%、就職者の約44%が就いている。2023年度はアンケートの回収率が低下したが、これらの傾向は過去3年間と概ね同様である。

地質系の専門教育を受けた学生のおよそ半数が地質系とは異なる分野に就職していることは、多いのか少ないのか他の研究分野の情報を得ていないので不明であるが、少なくとも就職者のおよそ半数は地質系に関係する専門分野に就職していることは認識すべきことだと考える。

地質系の専門分野を細かくみると、専門業界就職といえる「土木・建築」および「資源・素材」分野は専門就職者の約72%と大半を占め、「研究職」は約17%、「教員（中・高）」は約11%となっている。これらの傾向も過去3年間と概ね同様である。

現代社会の重要な関心事である防災・減災や資源・エネルギー分野の地質技術者を多く輩出していることは評価できる。一方、専門業界での必要人数を十分確保できているかどうかは不明であるが、近年の学術大会における「地質系業界説明会」や年末に刊行している「地質系若者のためのキャリアビジョン誌」には多くの専門企業が参画しているので、業界の求人意欲は高いと考える。なお、これらの詳細については学会HPの「技術者教育（JABEEとCPD）」をご覧ください。

<http://geosociety.jp/engineer/content0003.html>

地質系の学問を研究し学生を教育する研究職は、就職者の約7%、専門就職者の約17%に当たる32名であり、過去3年間と同様の傾向を示している。学生の進路希望や少子化、研究職への厳しい就職環境が影響していると思われるが、我が国における地質系の学問研究をさらに発展させるためには「研究職」の増員は必要だと考える。

初等・中等教育を担う「教員（中・高）」は、就職者の約3%、専門就職者の約11%に当たる22名であり、研究職以上に少ない人数である。この傾向は過去3年間同様であり、初等・中等教育における地学教育に課題が残る。そのため、地質技術者教育委員会では地学教育委員会との共催で、2025年3月2日に「高等学校での地学教育と大学での専門教育との連携～地球科学を中等教育から高等教育にどのように繋げるか～」をテーマにしたJABEEオンラインシンポジウム（第5回）を開催して議論する予定である。

<https://geosociety.jp/science/content0178.html>

専門業界への人材の輩出を地質技術者教育の結果としてとらえると、輩出者数が多い大学のほぼ半数以上はJABEE認定プログラムを現在有しているか、あるいは以前に有していた大学である。このことから、技術者教育や専門業界への就職に関してJABEEは大きな実績を示しているといえる。

これまで説明した2023年度の傾向は、2020～2022年度の過去3年間と概ね同様であり、現在の地質系の若手人材の動向を示していると考えられる。これらのデータをもとに様々な分析をおこなうとともに、今後も継続して調査をおこなうことが地質系人材の動向把握に不可欠である。その動向をもとに地質学が社会の発展に今まで以上に貢献するためには、どのような対応や方策が必要であるかを日本地質学会が検討することが重要である。

（担当：佐々木和彦）

※なお、下記は学会HP会員のページ（要ログイン）に掲載しています。

- ・2023年度卒業生・修了生対象 地質系若手人材動向調査 対象大学一覧
- ・2023年度 地質系若手人材動向調査結果一覧

☆関東支部

案内

2025年度関東支部総会・講演会開催のお知らせ

関東支部では、下記のように支部総会および講演会をハイブリッド形式（会場+zoom会議）で開催いたします。

支部総会に先立って行われる講演会（共催：一般社団法人関東地質調査業協会）は、非会員の方も参加可能です。ぜひ皆様お問い合わせの上ご来臨くださいますようお願い申し上げます。

日時：2025年4月12日（土）14:00-16:45（13:30から講演会受付開始）

場所：北とびあ第2研修室。JR京浜東北線王子駅北口徒歩3分；東京メトロ南北線王子駅5番出口直結；東京さくらトラム（都電荒川線）王子駅前徒歩5分。

【講演会】

共催：一般社団法人日本地質学会関東支部・一般社団法人関東地質調査業協会

タイトル：「潜水船・水中ドローンによる島弧-海溝系の海底露頭観察」

講師：山口飛鳥氏（東京大学大気海洋研究所）

要旨：島弧-海溝系の海底は、堆積・侵食・地震時の変位など、さまざまな変動の記録を保持している。そのため、海底における地質過程の理解は、陸上で観察される地層や変形構造の成因を解明するうえでも重要である。本講演では、南海トラフおよび日本海で近年実施した潜航調査に基づく海底露頭の観察事例を紹介し、その意義について議論する。

2023年に「しんかい6500」を用いて実施した南海トラフの調査では、潮岬海底谷の壁沿いに露出した連続露頭を観察し、南海付加体から熊野前弧海盆最下部にかけての層序を明らかにした。また、2024年に水中ドローン（小型ROV）を用いて能登半島珠洲沖・輪島沖で実施した調査では、同年の能登半島地震で形成されたと考えられる海底地震断層（主断層に付随して活動した副次的な断層）を発見した。これらの調査に先立ち、海底地形測量・反射法地震探査・採泥・掘削などの手法を用いた事前検討を行い、観察地点を選定している点も重要であり、これらの手法と適切に組み合わせることで、潜航調査の意義はさらに高まることが期待される。

講演会資料：PDFファイルを支部Webサイトに4月初旬に掲載予定。

講演会の定員：会場100名+オンライン100名（ハイブリッド形式）。

参加費：無料

CPD単位：1.5単位取得可

参加申込方法：2025年度地質学会関東支部総会・講演会参加申込フォーム（4月10日（木）17時締切。3月下旬に支部Webサイトに掲載予定。

【関東支部総会】

講演会終了後、開催されます。総会・講演会の参加申込フォーム、議案書、予算案は3月下旬ごろに支部Webサイトに掲載する予定です。総会を欠席される関東支部会員の方は議決権行使書フォーム（3月下旬に関東支部のWebサイトと支部MLにてお知らせします）か委任状のご提出をお願いします。

委任状送付方法：下記の3つの方法があります。

1. 2025年度委任状フォーム：3月下旬に支部Webサイトに掲載予定。

2. 郵送またはFAX：下記にお送りください（4月10日（木）必着）。

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F

日本地質学会事務局気付 関東支部事務局

FAX：03-5823-1156

3. E-mailによる送付の場合：関東支部のメールアドレス（kanto@geosociety.jp）へ下記の内容の委任状をご送付下さい（4月11日（金）17時締切）。

問い合わせ先：関東支部幹事長 加藤 潔（駒澤大学）

電話：090-1705-7516

Eメール：kiyoshi.katoh@gmail.com

<全体プログラム>

13:30 受付開始（ハイブリッド形式；CPD1.5単位取得可）

14:00-15:30 講演会

共催：一般社団法人日本地質学会関東支部・一般社団法人関東地質調査業協会

講師：山口飛鳥氏（東京大学大気海洋研究所）

「潜水船・水中ドローンによる島弧-海溝系の海底露頭観察」

15:30-15:40 質疑応答

15:40-15:50 休憩（講演会のみに参加の方はご退室）

15:50-16:45 関東支部総会

支部功労賞授与式

議長選出

議案審議 第1号議案 2024年度活動報告・決算報告

第2号議案 2025年度活動計画

第3号議案 2025年度予算案

<関東支部総会委任状>

2025年4月12日（土）開催の日本地質学会関東支部総会に出席できませんので、当日一切の議決権を

君（又は、議長）に委任します（空欄の場合は議長とします）。

2025年 月 日

住 所：

会員氏名：

☆関東支部

報告

関東支部サイエンスカフェ
「地震がつくる大地 ～隆起でできた日本列島～」
実施報告

関東支部では、2025年1月12日（日）にサイエンスカフェ「地震がつくる大地 ～隆起でできた日本列島～」を開催しました。ゲストスピーカーには（国研）産業技術総合研究所の宍倉正展さん、ファシリテータにはこれまで全ての関東支部サイエンスカフェをご担当いただいている科博SCAの岡山悠子さんをお迎えしました。会場は、東京都世田谷区下高井戸商店街にあるベルギービール専門ビアバー「アグリオ」です。アグリオでは、本サイエンスカフェ3回目の開催となります。やや狭いのではと言われるアグリオのフロアのサイズ感は、演者と参加者の距離を半ば強制的に縮め、一体感を生む大きな要素となっていると考えています。当日は、事前予約制でほぼ満席となる19名の方々に参加していただきました。参加者の内訳は、地質学会員4名、非会員15名で、40代から70代までの方に参加していただきました。この内、6割の方々が業界関係以外の方となります。今回、申し込みには、イベント管理システムであるPeatixを利用しました。募集サイト構築から申し込み受付、支払いまで一貫したシステム上で完結し、主催者側の手間は大幅に軽減されました。また、これまでのサイエンスカフェの一般向けの広報は、ほぼX（旧：Twitter）のみとなっておりましたが、Peatixのアクセス解析によるとPeatixアプリから当イベントサイトにたどり着かれている方が、メールリストなどから直リンクでサイトを訪れた方に次ぐ数となっており、これまでアプローチできなかった層へのアピールにも成功したのではないかと思います。

さて、講演の序盤は、宍倉さんが地球科学を志すきっかけとなった高校時代の恩師のお話から始まり、そもそも地震とは？活断層とは？地形の変位を調べることで何がわかるのか？といった基礎知識を大変わかりやすいスライドを元に説明していただきました。一般参加の方にもそれらをよく理解していただけたことが事後アンケートから伺えます。本サイエンスカフェの題名でもある、なぜ地震で大地ができるのか？については、房総半島を例に関東地震によりどのような沿岸隆起が起こったかなど、宍倉さんの豊富な研究事例を元に紹介されました。ヤッコカンザシに関する鉄板ギャグも効果バツグンであったと思います。



アグリオ店内の様子。スクリーンに向かって右手はゲストの宍倉さん、左手はファシリテータの岡山さん。写真提供：納谷友規会員

ます。後半は、多くの参加者が期待されていたであろう能登半島地震に関する話題を提供していただきました。近年の一連の活動より前から観測を行っていた宍倉さんならではの、現地の隆起量のわかりやすい比較写真や、この地震の前までに明らかになっていたこと、そこから予測される事象と実際に起こったことの比較など、迫力のある最新の研究成果をご紹介いただきました。

さて、いつも通り、参加者が「？？」となった瞬間、ファシリテータの岡山さんがその空気を回収してくださることで、一般の方と宍倉さんの距離をぐっと近づけてくださいました。毎度のことながら、話し手と聞き手を繋ぐファシリテーションの重要性を認識しました。

事後アンケートでは、参加された皆様には概ね高い満足度評価をしていただきました。ただ、5段階評価の5（最上位）を全ての方に選んでいただけなかったことに、宍倉さんは大いに奮起されているようです。今後さらにももしろい話題提供をいただけるのではないかと期待しております。今回のサイエンスカフェについてだけでなく、今後期待するテーマなどについても沢山のご意見をいただいております。日本地質学会会員の皆様には今後も楽しい話題を提供できるようご協力いただけますと幸いです。最後に、翌日から能登に調査に行かれるというお忙しい中、話題を提供してくださった宍倉さん、期待通りイベントを完璧に進行してくださったファシリテータの岡山さん、サイエンスカフェに参加してくださった皆様に御礼申し上げます。

（日本大学 金丸龍夫）

訃報

本会の次の方々が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

名誉会員 小西健二（2024年10月25日） 杉村 新（3月1日）

正会員 千代田厚史（2021年6月4日） 辻 隆司（2024年10月18日）

古川克彦（2024年1月27日） 徳山英一（1月13日） 松原尚志（3月6日）

第7回国際レルゾライト会議 参加報告

名古屋大学大学院 環境学研究科
博士後期課程1年
松山和樹

はじめに

2024年10月2日から4日にかけて、スペイン・オビエドで7th Orogenic Lherzolite Meetingが開催された。本会議は、野外調査と分析を基盤とする構造地質・岩石学者だけでなく、実験や数値シミュレーションなど専門を異にする研究者が、単一のセッション内でマントル研究の最新の成果について発表・討論するという学際的な会議である。今回は欧州を中心とする14カ国から70名を超える参加があり、日本からは森下知見氏（金沢大学/JAMSTEC）、山崎徹氏（産総研GSJ）、井上創氏、松山和樹（名古屋大学）が参加した。本会議のもう一つの特徴は、良く研究されたかんらん岩体の近くで会議を開催することで充実した野外巡検を会議と併せて行うことである。今回は、プレ会議巡検としてCabo Ortegal複合岩体を2日間かけて見学した。本稿では、筆者が参加した2日間の事前巡検と3日間の会議の様子を報告する。

野外巡検

会議直前の2日間で行われた巡検には約50名が参加し、Marco A. Lopez-Sanchez氏（オビエド大学・スペイン）らの案内のもと、保存の良い輝岩を伴う超苦鉄質岩と高温・高圧の変成岩を観察した。Cabo Ortegalはスペイン北西部に分布し、陸域・海域を併せて約800 km²がUNESCO世界ジオパークに認定されている世界でも屈指の複合岩体である。同複合岩体はモロッコ～イベリア・中央ヨーロッパに広がるパリスカ造山帯に属し、古生代の Gondwana 大陸の衝突イベントを記録している（Simancas, 2019など）。本巡検に際して作成された巡検案内書はなんと58ページにわたる大作で、参加者を驚かせた。さらにこの案内書の表紙裏には、議論と図を加えたウェブ限定バージョンのQRコードが添付されており、運営委員会の情熱を



図1 巡検(1日目)で観察した輝岩-ダナイト露頭。緑色を呈する層が輝岩、茶褐色を呈する層がダナイト。

思い知らされた。

スペイン北部の朝は非常に遅いため（会期中の日の出はおおよそ8:30）、巡検バスの出発は9時に設定された。1日目は、同複合岩体において最大の露出規模と岩相の不均質性で特徴づけられるHerbeira岩体のカンラン岩を観察した。午前中は崖に沿って約1 kmを歩き、輝岩やカンラン岩の露頭を観察した。当日は悪天候によるホワイトアウトのせいで景観は楽しめなかったものの、Tilhac Romain氏（IACT・スペイン）による詳細な解説と併せて露頭観察は無事に実施された。特に筆者の記憶に残ったのは、層状構造をなす輝岩-ダナイト露頭であった（図1）。およそ10 cm厚の輝岩とダナイトが織り成す美しい構造だけでなく、メルト-岩石相互作用に関連したその形成過程（Tilhac et al., 2016）についても解説があり、北海道の幌満カンラン岩体を研究テーマとする筆者にとってはとても有意義な経験となった。

2日目は、Cabo Ortegal複合岩体に産する苦鉄質の高温/高圧変成岩を観察した。午前中は海岸線沿いに歩きながら露頭を見学し、午後は灯台付近の露頭見学と集合写真の撮影を行った。特に、明瞭な面構造と線構造で特徴づけられる層状グラニュライトや、粗粒角閃石/ザクロ石で特徴づけられるエクロジャイトは非常に芸術的であった。

講演・ポスターセッション

本会議では上述の通り、参加者全員が単一のセッションに参加し、マントル研究の成果発表と議論を行った。会期は3日間で、1・2日目は口頭発表→昼食→ポスター発表（2時間）→口頭発表、3日目は口頭発表→昼食→Cabo Ortegal巡検のラップアップと次回の会議に向けた討論、というスケジュールが進められた。また本会議はオビエド大学が所有する歴史的な建物が会場として使用され（図2）、筆者だけでなく、欧州からの参加者たちもその荘厳さに興奮していた。

本会議ではそれぞれのセッションにタイトルが与えられていなかったものの、類似するテーマの発表は同一セッション内で発表されるようにプログラムが組まれた。1日目の午前中は、“枯渇マントルとメルト-岩石相互作用”に関連した発表が行われた。流体包有物、鉱物粒子内の含水量、結晶方位定向配列など研究対象は多岐にわたったが、どの研究も丁寧な解析がベースになっており、議論は白熱した。1日目の午後は、前半に“ocean-continent transition zoneの肥沃マントル”、後半に“Cabo Ortegal岩体”に関連した発表が行われた。特に後半の



図2 口頭発表の会場の様子。

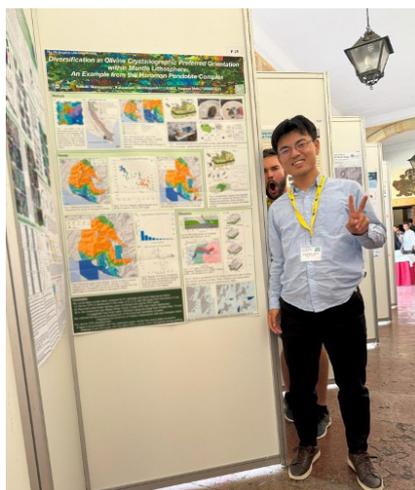


図3 筆者のポスター発表の様子。後ろに映っているのは本会議で友達になった Jessy Dominique さん（クレルモン・オーベルニュ大学）。

Cabo Ortegal岩体セッションは、事前巡検で見学した直後ということもあり参加者の注目を集めた。

2日目の午前は、“マントルの元素サイクル”、“鳥弧マントルの岩石学”、“海洋マントル”という順でテーマが移り変わった。岩石学的手法だけでなく実験的手法を用いた研究も紹介された。2日目の午後は、“マントル剪断帯”と“変質作用と流体”に関連した研究発表が行われた。この時間帯では、ここ10数年で発展した解析手法を用いて結晶方位定向配列や流体包有物について検討した研究が多く見受けられた。

3日目の午前は、“微量元素”と“マントルの時間変化・進化”をテーマとする研究が紹介された。マントルのダイナミクスに示唆を与える発表も多く、質疑応答が非常に盛り上がった。3日目の午後は、次回の会議開催に向けた話し合いが行われ、開催場所や時期に関して詳細な話し合いが行われた。この Orogenic Lherzolite Meetingは、第6回（モロッコ）が2014年に開催されてから、第7回の開催まで10年間の空白期間があった。マントル研究分野全体を盛り上げるためにも、4年に1回のペースで開催したいという提案もあり、次回（第8回）はフランス・コルシカ島で2028年に開催する方向で議論が進んだ。また、数か月に1回ペースでの研究ウェビナーを開催する

案も出され、実現に向けて調整される見込みとなった。

ポスターセッションは、1日目と2日目の昼食後、14-16時に実施された。今回は28件のポスター発表が行われ、コーヒーやおやつを片手に各所で盛り上がりを見せた。筆者は2日目に幌満カンラン岩体の結晶方位定向配列と構造発達過程についての発表を行い、カンラン岩の変形組織解析を専門とする研究者と有益な議論ができた（図3）。この研究は会議後、論文として受理・公開されたこともあり（Matsuyama and Michibayashi, 2024, Tectonophysics）。記憶にも残る発表となった。海外学会の発表は筆者にとって初めての経験であったが、発表を通じて同一分野で研究する知人も増え、研究の糧だけでなく良い思い出にもなった。

おわりに

7th Orogenic Lherzolite Meetingは、世界各地における最新のカンラン岩研究の動向・成果が共有されただけでなく、博士学生や若手研究者にとっては交流を広げる機会となった。筆者個人としても、今回初めて知り合ったJessy さん（図3）と日本のアニメの話題をきっかけに意気投合し、とても仲良くなった。またポスター発表では、カンラン岩の変形組織解析の“手練れ”である研究者と有益な議論を行うことができ、自身の成長につなげることができた。

筆者は2025年の2月からフランス・モンペリエ大学への長期研究留学を予定しており、欧州のカンラン岩体を対象とした新たな研究に着手する。この長期滞在の間に、今回の会議で得た知見も活用しながら、“自分の専門性”を広げ、磨いていきたいと思う。

常時投稿をお待ちしています。編集は、現在以下の6名で行っています。原稿は1500~4500文字程度、図・写真3点以内を目安に、e-mailでお送りください。

谷元暲太（茨城大） atani.geo@gmail.com

吉永亘希（筑波大） koki9824k@gmail.com

諸星暁之（東京大） t-morohoshi@eps.s.u-tokyo.ac.jp

福井瑩子（愛媛大） teco14.hm@outlook.com

會田幸樹（東京大） aida-koki322@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

小坂日奈子（茨城大） 23nm307s@vc.ibaraki.ac.jp

表紙紹介

Nkhachira Permian coal Mine, マラウイ, アフリカ

写真・文：清川昌一（九州大学）

マラウイは、アフリカ大地溝帯の南端部に位置する国です。その基盤岩は太古代や原生代の基盤岩類が分布しますが、北部には古生代の伸張場でできたカルー堆積盆が残っています。写真は、ペルム紀の石炭層を手彫りしている鉱山の様子になります。通常は170人の坑夫が手押し車に石炭を乗せて積み出しており、若干傾斜した石炭層をピラー（柱状の地層）と枕木で固定しながら奥に掘り進んでいます。

学会記事

2024年度第3回理事会議事録

日時：2024年12月14日（土）14:00-16:00

【WEB会議形式】

出席役員：出席理事43名，出席監事2名

- ・会長1名：山路 敦
- ・副会長2名：杉田律子・星 博幸
- ・常務理事1名：亀高正男
- ・副常務理事1名：内野隆之
- ・執行理事8名：岩井雅夫・保坂（内尾）優子・加藤猛士・小宮 剛・坂口有人・高嶋礼詩・辻森 樹・細矢卓志・矢部 淳
- ・理事会議長1名：野田 篤
- ・理事28名（議長・副議長を除く）：青矢睦月・天野一男・磯崎行雄・大友幸子・岡田誠・笠間友博・加藤 潔・香取拓馬・金丸龍夫・野口（神谷）奈々・清川昌一・桑野太輔・小松原純子・齋藤 真・佐々木和彦・澤 燦道・沢田 健・沢田 輝・下岡和也・菅沼悠介・田村嘉之・中澤 努・西弘嗣・広瀬 亘・松田博貴・道林克禎（～15時まで）・矢鳥道子・和田穰隆
- ・監事：岩部良子・山本正司

事務局1名：澤木寿子

欠席役員：理事（7名）：大坪 誠・尾上哲治・川村紀子・高野 修・松田達生・山口飛鳥・山本啓司

- ・成立要件：理事総数50名の過半数26名
本日の出席者43名で本理事会は成立。
- ・議決：出席者の過半数22名

報告事項

1. 執行理事会報告（亀高常務理事）
亀高常務理事から今年度第4～6回の執行理事会議事録および第7回執行理事会議事次第から、以下の点について報告があった。
 - ・2024年度「京都賞」受賞のポール・ホフマン博士の受賞記念講演会（11/14開催，会場：東大駒場キャンパス）に対して，地質学会として協賛した。また，同氏の紹介記事（特別寄稿）を磯崎会員に執筆していただき，地質学雑誌へ掲載した。
 - ・学会としてはIGC韓国大会への協力を見送ったが，本大会と合わせて開催されたIUGS会合にて雲仙・喜界島が地質遺産に登録されたことなどの報告原稿をIUGS分科会委員長の掛川 武氏（東北大）より寄稿いただいた。会員にとって有益な情報であり，ニュース誌に掲載予定。
 - ・ジェンダー・ダイバーシティ委員会より，学術大会での発表者や座長のジェンダーバランスに配慮するよう要望があった。現状の男女比など必要な情報を当該委員会に報告するとともに，引き続き注視・検討していく。
 - ・専門部会・支部のメール配信機能について，運用準備が完了し，各専門部会・支部から配信担当者を選出し（5つの支部・専門部会からは担当者からの連絡待ち），そ

れぞれに IDとパスワードを通知して運用を開始した。今後は各支部，部会毎に情報発信を行う。

- ・防災学術連携体シンポジウム「阪神・淡路大震災30年，社会と科学の新たな関係」が1/7に開催予定。地質学会からは氏家恒太郎会員（筑波大学）に発表いただく。
 - ・大学改革支援・学位授与機構から要請のあった国立大学教育研究評価委員会専門委員候補者として，3名の会員を推薦することとした。
2. 総務委員会（加藤猛士理事）
 - ・2024年11月末時点の会員動静について報告があった。加えて，前回（8月）理事会以降の逝去会員4名の報告があり，黙祷した。また，今年度末退会および除籍予定者一覧を回覧し，確認した。
 3. 広報委員会（坂口理事・内尾理事）
 - ・学会Webサイトリニューアルの進捗状況について報告があった。これまで理事等から寄せられた改善点は概ね反映できる見込み（支部等の主催のイベント募集記事などもTOP表示可能）。
 - ・ジオルジュ 2024年後期号の配布，フォトコンテスト募集中について報告・周知があった。
 4. 行事委員会（高嶋理事・山口理事）
以下，学術大会に関する報告があった。
 - ・2024年山形大会の実施報告：参加者数728名，講演数561件，巡検8コース参加者合計142名，そのうち7コース分の巡検案内書は，地質学雑誌に掲載済み（残り1コース分は査読中）。前年の京都大会と比べ大会参加者数はやや減少したが，講演数や巡検参加者数は増加した。開催費用は設営費等が予想以上に嵩み，来年度以降の支出削減が検討課題として挙げられる。
 - ・2025年熊本大会の準備状況：開催期間は2025年9月14日（日）～16日（火），プレ巡検は9/12-13，ポスト巡検は9/17-18。熊本大学や熊本城ホールなど各会場手配済み。大会委員長：松田博貴会員，事務局：小松俊文会員，巡検担当：湯口貴史会員，案内書編集委員長：尾上哲治会員
 - ・2026年金沢大会の準備状況：開催期間は2026年9月12日（土）～14日（月・祝），会場は金沢大学角間キャンパス。LOCが立ち上がり，これから本格的に準備が始まる。大会委員長：長谷川卓会員，事務局：森下知見会員，遠藤徳孝会員，巡検担当：ロバート ジェンキンス会員・水上知行会員，案内書編集委員長：大藤 茂会員
 - ・また，2027年つくば大会までは確定。2028年大会は近畿もしくは四国支部での開催をそれぞれ支部に打診予定。
 5. 地質学雑誌編集委員会（小宮理事）
 - ・2024年12月14日時点の地質学雑誌の編集

状況について報告があった。投稿論文数は57編で前年並み。

- ・2023および2024年度学会各賞受賞者にレビュー論文の投稿を依頼中（概ね受諾済み）。
6. Island Arc編集委員会（辻森理事）
 - ・2024年12月14日時点のIsland Arcの編集状況について報告があった。Articleが32編，Review Articleが2編となり，昨年（2023年：Article 27編，Review Article 2編）をわずかに上回ったが，この投稿状況は芳しくない。理想的には年間40～50編が目標（2020年：Article 51編）。IF 2023= 1.0，IF 2024=予想1.2。
 - ・1月から新体制となり，ジェンダー・ダイバーシティ委員会からの提言を受け，女性委員を2名追加する。
 7. 地学教育委員会（岩井理事）
 - ・2024年山形大会 ジュニアセッション：地質学会News誌に掲載の通り。審査への協力感謝。
 - ・地震火山地質子どもサマースクール：2024年度吉野川大会の開催報告，2025年度御嶽大会の準備状況について報告があった。2026年度大会候補地（三陸ジオパーク・気仙沼市）からの申請書提出が遅れていることから，委員長が支援し提出を促す予定。2027年度大会開催地の公募を開始しており，能登半島地震と関連して金沢大学やチバニアン関係にも打診予定。
 - ・地質技術者教育委員会および生涯教育委員会との連携：オンライン会議等を行い，情報・意見交換を継続している。
 8. 地質技術者教育委員会（加藤猛士理事）
 - ・キャリアビジョン誌：今年で5年目となり，12/13現在69社からの応募があった（12/20締切で募集中）。来年2月ごろ出版，各大学への配布を予定している。
 - ・第5回JABEEシンポジウムを2025年3月2日（日）に，地学教育委員会と連携してオンライン形式で開催予定。高大連携につながるプログラム案が報告された。1月から参加者の募集を開始するので，周知協力が呼びかけられた。
 9. 生涯教育委員会（矢部理事）
シニア会員の満足度向上や活躍の場を創出する検討材料として，シニア会員へのアンケートを実施予定している。設問内容について報告があり確認した。年内配信目指し準備を進める。
 10. ジオパーク支援委員会（天野理事）
「大地と人の物語 地質学で読み解く伝承（仮）」の編集状況について報告があった。出版社と編集委員が第1稿を確認，第2稿を2名の査読者が査読し，その後出版の予定。全19件の原稿のうち18件投稿済み。少し日程が遅

れているが、当初予定通り来年4月出版を目指し引き続き進める。

11. 各賞選考委員会（沢田理事）

各賞の推薦状況について報告があった。当初の締切期限である12/2時点で9件の推薦があったが、例年より推薦数が少ないため12/20まで締切を延長している。ぜひ推薦をお願いしたい。

12. 若手活動運営委員会（桑野理事）

2024年山形大会若手交流会および若手日帰り巡検実施報告について報告があった。若手交流会は、大会前日の9/7に開催し、59名が参加。活発な交流の場となり、参加者の反応も良かったので来年も開催したい。巡検は愛知県犬山市および岐阜県各務原市にて10/26に開催し、26名の参加があった。来年2/14には、昨年実施した地質系業界オンライン交流会の開催を予定。来年度も今年度同様の活動を予定している。

13. その他

学術著作権協会へのAI利用に係る権利委託について、JpGUや他学会の動向を見ながら検討を進めたいとの報告があった。（亀高常務理事）

・支部長連絡会議にてシニア会員の活動についてヒアリングを実施。まだ回答のない支部もあるが、支部によって活動の温度差が感じられる。結果については、何らかの形で理事にも共有したい。（杉田副会長）

審議事項

1. 2025年度総会の日程について（亀高常務理事）

2025年6月7日（土）14時から開催することが提案された。審議の上承認された。

2. 2024年度事業実績概要（案）（亀高常務理事）

「学術大会」「学術研究活動」「出版活動」「地質災害対応」「広報・普及活動」「社会貢献」「地学教育」「国際連携」「会員サービス・学会運営」の観点から説明がなされた。今回は提示のみとし、次回理事会で審議する。ポール・ホフマン氏受賞記念講演会について小宮理事より報告された。西理事より、韓国地質学会との今後の連携について質問があり、亀高理事からしばらくは様子を見るとの回答があった。

3. 2025年度事業計画骨子（案）（山路会長）

「学術大会」「学術研究活動」「出版活動」「地質災害対応」「広報・普及活動」「社会貢献」「地学教育」「国際連携」「会員サービス・学会運営」の観点からの骨子案が示された。今回は提示のみとし、次回理事会で審議する。

4. Island Arc編集委員長の交代について（辻森理事）

Island Arc編集委員新体制の編集長として、長谷川卓会員（金沢大学）と市山祐司会員（千葉大学）の2名が提案された。審議の上承

認された。

5. 名誉会員推薦委員会委員の選出（星理事）

2025年度名誉会員推薦委員会委員として、執行理事会より階層別代表委員4名を選出したとの説明があった。続いて、理事会代表委員として清川昌一理事が推薦された。上記2件について審議の上いずれも承認された。続いて、日本地質学会名誉会員推薦委員会規則に従った新しい推薦書式が提案された。25年度より本書式を利用して応募いただく。

6. 運営規則、各賞選考規則および各賞選考委員会規則の改正（亀高常務理事）

学生優秀発表表彰の対象を「学生会員」から「学籍のある正会員」に変更、各賞選考委員の選出基準を理事に限定しないなど、改正の趣旨、方針について説明された。文言の統一等細部の整備が十分でないため今回は審議を見送る。改正案は次回理事会に上程する。

7. 2025熊本大会巡検Fコースの一部変更（高嶋理事）

案内者都合によりFコース（ジュラ紀付加体）をポスト巡検からプレ巡検に変更することが提案された。これについて、ポストからプレに変更することで中生界に興味を持つ参加者のバッティングが避けられテーマバランスが改善されることが説明された。審議の上承認された。関連して、今後軽微な変更は行事委員会・執行理事会に一任することで良いことが確認された。

監事コメント

（山本監事）審議事項の各種規則改正について、公平性を担保するような努力をお願いしたい。

（岩部監事）2024年事業報告、2025年事業案について、次回理事会で審議に向け引き続き努力をお願いしたい。ホームページリニューアルについて、利用者の使いやすいホームページ作成を願いたい。

以上、この議事録が正確であることを証するため、議長、副議長および出席監事、理事は次に記名・捺印する。

2024年12月27日
一般社団法人日本地質学会

理事：議長 野田 篤

代表理事：会長 山路 敦

理事：副会長 杉田律子

理事：副会長 星 博幸

監事：山本正司

監事：岩部良子

理事：出席理事名（省略）

2024年度 第5回執行理事会議事録

日程：2024年10月19日（土）13:00-16:00

【WEB会議】

出席：山路 敦、杉田律子、星 博幸、亀高正男、内野隆之、内尾（保坂）優子（15時～）、大坪 誠、加藤猛士、小宮剛、坂口有人、高嶋礼詩、辻森 樹、細矢卓志（14時～）、松田達生、矢部淳、山口飛鳥

監事：岩部良子

欠席：岩井雅夫、尾上哲治 山本正司（監事）

事務局 澤木

*定足数（過半数：10）に対し、執行理事16名の出席

*前回24/04議事録案は、本執行理事会にて承認された。

報告事項

1. 全体的報告

・NPO法人日中交流推進機構より中国山東省地質鉱物測量開発局研究所の訪日研修に対して、講師派遣の依頼があった。産総研および防災科研の窓口を紹介することで対応した。

・日本地球惑星科学連合より、学協会長会議の幹事会再任依頼があり、承諾した（任期1年、再任の制限なし）。

2. 運営財政部会（加藤・細矢）

1. 総務委員会

<共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等>

・日本応用地質学会より、令和6年度技術者倫理講習会（11/27オンライン）への後援依頼があり、承諾した。

・三浦半島地質調査会より、観察会「大地を分ける武山断層！」（12/21）への後援依頼があり、承諾した。

・神奈川県立生命の星・地球博物館より、企画展「すな～ふしぎをみつけよう」（2025/2/22-5/11）への後援依頼があり、承諾した。

・第16回岩の力学シンポジウム（2025/1/14-16、於熊本城ホール、主催一般社団法人岩の力学連合会）より協賛依頼があり、承諾した。

・山田科学振興財団より、2025年度研究援助候補推薦依頼があった（学会締切2/3）【→geo-flash, ニュース誌10月号掲載】

・第4回羽ばたく女性研究者賞（マリア・スクウォッドフスカ＝キューリー賞）公募（12/10）の周知・掲載依頼があった。【→geo-flash, ニュース誌10月号掲載】

・第66回藤原賞受賞候補者推薦依頼（学会締切11/29）【→geo-flash, ニュース誌10月号掲載】

<会員>

- 1. 今月の入会者：正会員4名（一般3、学生1）
正会員一般（3名）箱岩寛晶※再入会、田中美知也、荒木 藍
正会員学生（3年バック：1名）神山寧依子
- 2. 今月の退会者 なし
- 3. 今月の逝去者 2名
名誉会員（1）佐藤 正（逝去日：2024年9月15日）
正会員シニア（1）田中 保（逝去日：2024年9月14日）
- 4. 2024年9月末会員数
賛助：36、名誉：37、ジュニア：6、正会員：3153〔内訳：一般2012、シニア862、学生279〕合計3232（昨年比-49）

<会計>

- ・2024山形大会収支報告:山形大会は大幅な赤字収支が見込まれる。学生アルバイトを積極的に使えなかったことにより、会場設営・設備費が予想以上に高額となった。参加費を少し上げて対応できるレベルではないため、来年度以降の支出削減について検討する必要がある。

<その他>

- ・規則の整理について：先月の執行理事会で規則の整理を依頼した業務委員会について、作成着手がまだの委員会には総務委員会が原案を作成し、業務委員会担当理事が必要箇所を記入の上、総務委員会に返送することにした。
- ・学生会員の種別が十分浸透していない現状で、学生会員の申請手続きをしていない正会員にも配慮するため、学籍があれば学生優秀発表賞にエントリーできるように各賞選考規則の変更を検討した。
- 3. 広報部会（坂口・内尾・大坪・松田）
1) 広報委員会（坂口）
・理事会MLにWEBサイトリニューアル構成案を回覧し、意見徴収を行った。支部や各種委員会より意見、要望が出された。それらを踏まえ検討を進める。10/23に業者と打ち合わせ後、見積もりを作成してもらう。
・SNSに関して、X（旧Twitter）のフォロワー数が現時点で2325人に増加（6月末では1992人）。Xの運用の見通しが立った。
・第16回惑星地球フォトコンテストの応募受付を開始した（締切2025/2/2）。
- 4. 学術研究部会（辻森・尾上・高嶋・山口）
1) 行事委員会（高嶋・山口）
・9月24日（火）18時より地質学会山形大会の反省会を行事委員会にて実施。反省事項の取りまとめを行った。
・山形大会学生優秀発表賞の審査結果について報告があった。審査結果入力フォームについて、デザインや連続入力する際の手間についての意見があった。次回大会に向けて可能な範囲で対応する。
・2025年のJpGUプログラム委員を宇野正起

- 氏（正）と野々垣進氏（副）に決定した。
・東北大の掛川 武氏より、地質遺産、IUGS、IGCに関する解説・報告の原稿が提出された。IGCに関する文言について、編集委員会から具体的な機関名の削除と表現を柔和にした修正文を同氏に提示し確認してもらうこととした。
- 2) 専門部会連絡委員会（尾上）
特になし
- 3) 国際交流委員会（辻森）
・タイ及びロンドンとのMOUについて対応中。
- 4) 地質標準化委員会（内野）
特になし
- 5) 学術戦略WG（尾上）
特になし
- 6) ショートコースWG（山口）
・次回のテーマとして、著作権や研究倫理教育に関する講習の案が出された。集客力が危惧されるが、このようなコンプライアンス系の講義の重要性は高まっているので、今後ショートコースで行うか別の形で開催するか検討していく。
- 5. 編集出版部会（小宮・辻森）
1) 地質学雑誌編集委員会（小宮）
(1) 編集状況報告（2024年10月18日現在）
・2024年投稿論文：47（昨年比-3）〔内訳〕
論説18（和文16、英文2）、報告10（和文8、英文2）、レター6（和文6）、ノート2（和文2）、フォト1（和文1）、特別寄稿1（和文1）、巡検案内書9
・査読中21、受理済み4、入稿・校正中1、130巻公開済み33件（400ページ）
・今年度学会各賞受賞者に総説・解説等の原稿執筆を会長名で正式に依頼する。
- 2) Island Arc編集委員会（辻森）
・新査読・投稿システムが抱える問題は、徐々に改善しつつある。
- 3) 企画出版委員会（小宮）
特になし
- 6. 社会貢献部会（矢部・岩井・坂口）
1) 地学教育委員会（岩井）
特になし
- 2) 地質技術者教育委員会（加藤）
・地球・資源分野JABEE委員会の委員交代があった。委員 向吉秀樹（島根大学）（増本 清委員の後任:2024年10月1日より）
- 3) 生涯教育委員会（矢部）
・ニュース誌に掲載している博物館紹介記事について、博物館は数が多いので1号に載せる件数を増やすことを検討中。
・シニア会員の活躍の場を創設・提供するための、シニア会員向けのアンケートを準備中。
- 4) 地震火山地質こどもサマースクール（岩井）
特になし
- 5) 地質の日（矢部）
来年の街中ジオ散歩の計画、準備を開始す

- る。
- 7. その他執行理事会の下に設置される委員会及び組織
1) 利益相反マネージメント委員会（亀高）
特になし
2) 若手育成事業検討WG（内野）
特になし
3) 表彰制度検討WG（亀高）
特になし
- 8. 理事会の下に設置される委員会
1) ジオパーク支援委員会（矢部）
特になし
2) 地学オリンピック支援委員会（坂口）
特になし
3) 支部長連絡会議（杉田）
特になし
4) 地質災害委員会（松田）
特になし
5) 名誉会員推薦委員会（星）
・2025年度の委員について、階層別委員4名及び理事会代表委員1名について内諾を得た。12月理事会へ上程する。また、推薦書の雛形（ワードファイル）を用意した。
- 6) 各賞選考委員会（亀高）
特になし
7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（山口）
特になし
8) 法務委員会（亀高）
特になし
9) 若手活動運営委員会（星）
・若手巡検（10/26、愛知-岐阜）は定員に達したため申込を締め切った。
- 9. 研究委員会
1) 南極地質研究委員会（委員長 大和田正明）
特になし
2) 法地質学研究委員会（委員長 川村紀子；杉田）
特になし
- 10. その他
・シニア会員活躍について（山路）
支部で活躍の場をどう作れるかを検討してもらう。また、地質相談の委員として活躍してもらいたい。特に他のシニア会員を取りまとめることのできる中核的な人材を望む。
- 審議事項**
1. 2027年学術大会開催地について
関東支部長の久田健一郎氏より、2027年の地質学会学術大会を筑波大学で実施可能という報告を受け、筑波大での開催について承認した。
2. 学術著作権協会へのAI利用に係る権利の委託について
管理委託契約約款の改定（著作物利用形態にAI利用に係る権利を追加）に伴い、委託権

利団体宛に権利委託手続きの確認が行われている。これまでのアナログ・デジタルの複写複製利用に加えて、AI利用に係る委託の可否について、11月の執行业務会で改めて議論し、12月の理事会で最終的な審議を行う。先方には第2回回答期限である2月中旬までに回答する。

3. セッション多様性推進の取り組みについてジェンダー・ダイバーシティ委員会より、学術大会での発表者、座長についてのジェンダー配慮に関する学会方針の提示とプログラム編成時に配慮を求める要望があった。今後は、行事委員会に当該大会発表者の全男女比、セッション毎の男女比を提示し、プログラム編成時の参考にしてもらうこととする。また女性比率は学生など若手会員層で比較的高くなってきている。若手会員に積極的に座長を務めてもらいたい。これらについて、山口理事からジェンダーダイバーシティ委員会の天野委員長へ通知する。その他、国際的趨勢としては、男女以外のダイバーシティについて注視・配慮する必要があるのではとの意見もあった。

4. 男女共同参画学協会連絡会の退会について正式会員であるJpGUから情報が得られるので、地質学会としての正式加盟は不要と判断した。退会について承認された。

5. 国立大学教育研究評価委員会専門委員及び機関別認証評価委員会専門委員の候補者の推薦依頼があった。JABEE審査経験者が適当との意見あり。候補者を検討し、11月の執行业務会に改めて諮る。

6. 東大駒場キャンパスで行われるポール・ホフマン京都賞受賞記念講演会への協力について

講演会の配布資料の作成費について、地質学会へ費用負担の要請があり承認した。学会の協力体制も後援→協賛に変更される。資料印刷に関しては、作成されたPDF原稿を学会事務局よりネットプリント業者に発注することで対応する。

7. 会員構成情報の公開について

冊子体会員名簿に掲載していた各種会員構成のデータをHPやニュース誌などで公開してはどうかとの意見があった。今後、広報委員会と現在会員情報分析を行っている総務委員会を中心に検討していく。

監事コメント

(岩部) 山形大会の赤字収支について、今後の会員数の減少、物価高が進む中で、同じやり方では赤字は必至である。状況分析を行い、改善に向けた新たな取り組みをぜひ検討していただきたい。

以上

2024年11月16日
一般社団法人日本地質学会
会長(代表理事) 山路 敦
署名人 執行业務 亀高正男

2024年度 第6回執行业務会議事録

日程：2024年11月16日(土) 13:00-16:00

【WEB会議】

出席：山路 敦、杉田律子、星 博幸、亀高正男、内野隆之、岩井雅夫、内尾(保坂) 優子(14時半入室)、大坪 誠、尾上哲治(14時退出)、加藤猛士、小宮 剛、高嶋礼詩、辻森 樹、細卓志、松田達生、矢部 淳

監事：山本正司、岩部良子

欠席：坂口有人、山口飛鳥

事務局 澤木

*定足数(過半数：10)に対し、執行业務16名の出席

*前回24-05議事録案は、本執行业務会にて承認された。

報告事項

1. 全体的報告

・JpGU学協会長会議が11/27開催される。山路会長出席予定。

2. 運営財政部会(加藤・細矢)

1) 総務委員会

<共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等>

・新潟大学学術資料運営機構より、企画展「生きた化石シャミセンガイ」(7/24-8/31開催；地質学会後援)の実施報告があった。来場者522名。

・原子力総合シンポジウム2024(25/1/20、於日本学術会議講堂+オンライン)への協力依頼があり、承諾した。

・社会地質学会より、第34回社会地質学シンポジウム(12/6-7於日本大学文理学部+オンライン)への後援依頼があり、承諾した。

・ポール・ホフマン氏京都賞受賞記念 東京講演会(11/14 於 東大駒場キャンパス；地質学会協賛)が開催された。参加者約230名。

<会員>

1. 今月の入会者：なし

2. 今月の退会者 1名

正会員シニア(1) 深澤徳明

3. 今月の逝去者 1名

正会員シニア(1) 辻 隆司(逝去日：2024年10月18日)

4. 2024年10月末会員数

賛助36、名誉36、ジュニア6、正会員3156 [うち一般2015、シニア861、学生280] 合計3234(昨年比-50)

<会計>

・山形コンベンションビューロより11/15付で山形大会助成金の入金があった。

<その他>

・各賞選考規則の一部変更案(→審議事項へ)

3. 広報部会(坂口・内尾・大坪・松田)

1) 広報委員会(坂口)

・WEBサイトリニューアルの進捗状況：トップページに掲載するコンテンツの表示方法についてもう少し検討し、目途がついた後に見積を依頼予定。

・SNS(X)のフォロワー数は2300人を突破した。

4. 学術研究部会(辻森・尾上・高嶋・山口)

1) 行事委員会(高嶋・山口)

・2025熊本大会

→11月1日付けて巡検案内書の締め切りが近いことを、湯口氏より各案内者に送信。

→市民講演会・地質情報展：民間助成金を申請予定。

→大会サポート業者がアカデミック・プレインに決定した。LOCおよび学会事務局には、予算削減の為に、発注内容の吟味と、学生アルバイトの積極的な利用をお願いしたい。

→例年アウトリーチ巡検などで博物館関係者には協力を頂いている。引き続き、博物館の活躍支援という観点からも、学芸員の方々には巡検企画・案内で活躍して頂きたい。

・2026金沢大会

→特になし。

・2027筑波大会

→筑波大学および関東支部に執行业務会承認の旨を伝えるとともに、会場費の調査を依頼した。また、つくば市のコンベンション助成のサイトをお知らせし、積極的に活用するよう依頼した。

2) 専門部会連絡委員会(尾上)

・専門部会メールの配信準備が整い、現在、各専門部会長あてメール配信担当者の選出を依頼中。すでに連絡のあった専門部会のメール配信担当者には、順次管理者ユーザーのIDとパスワードを通知済。一部の専門部会では、部会登録者あてにメール配信済。

→担当者へ通知済(9専門部会) 地域地質&層序、海洋地質、岩石、応用地質、古生物、第四紀地質、環境変動史、構造地質

→まだ連絡無し(5専門部会) 堆積地質、火山、環境地質、情報地質、鉱物資源

3) 国際交流委員会(辻森)

なし

4) 地質標準化委員会(内野)

なし

5) 学術戦略WG(尾上)

なし

6) ショートコースWG(山口)

なし

5. 編集出版部会(小宮・辻森)

1) 地質学雑誌編集委員会(小宮)

(1) 編集状況報告(2024年11月14日現在)

・2024年投稿論文：50(昨年比-2)[内訳] 論説20(和文18、英文2)、報告11(和文9、

英文2), レター6 (和文6), ノート2 (和文2), フォト1 (和文1), 特別寄稿1 (和文1), 巡検案内書9

・査読中23, 受理済み0, 入稿・校正中6, 130巻公開済み33件 (400ページ)

(2) その他

・2024年度学会各賞受賞者に会長名で地質学雑誌への投稿依頼を行い, 承諾の回答を得た.

2) Island Arc編集委員会 (辻森)

・近年, 海外からの投稿が著しく減少している (特に中国からの投稿が減少). 雑誌のオープンアクセス化 (OA), 投稿料の徴収が一般的になりつつある. Island Arcは著者負担によってOAが可能であるが, 反面OAを希望しなければ誰でも無料で投稿できるというメリットがある. また, 大学によっては学生が投稿した論文のオープンアクセスを支援するところも増えている. Island Arcのメリットを強調しつつ, 引き続き投稿を呼びかけていく.

3) 企画出版委員会 (小宮)

・「大地と人の物語 地質学で読み解く伝承 (仮)」の進捗は順調.

6. 社会貢献部会 (矢部・岩井・坂口)

1) 地学教育委員会 (岩井)

・地質技術者教育委員会との連携: 地質技術者教育委員会が主催する3月2日の第5回JABEEシンポジウムに共催することとなった. 高校における地学教育の実態や特徴的な取り組みについて紹介して下さる講演候補者2-3名を推挙し, 運営に協力することとなった.

・生涯教育委員会との連携: 連携協議のためのオンライン会議を12月8日 (日) 13:00-14:00に実施予定.

・IODP Exp.405 (現行IODP最終航海) におけるアウトリーチ活動: 掘削船「ちきゅう」と高校・大学・博物館等をオンライン中継した授業・アウトリーチ活動が多数実施, 一部は新聞やテレビで報道 (online出版, YouTube等含む) された.

2) 地質技術者教育委員会 (加藤)

2025年3月2日に第5回JABEEシンポジウムを開催予定.

3) 生涯教育委員会 (矢部)

・地質学会Newsの連載記事を2025年も継続すべく, 西日本支部の博物館/ジオパーク関連施設の担当者選別を進めている. 1月号は北九州市立いのちのたび博物館で担当いただく予定.

・シニア会員向け, 学会に何を求めるか, また何を提供できるかのアンケートを年内に実施すべく準備を進めている.

4) 地震火山地質こどもサマースクール (岩井)
なし

5) 地質の日 (矢部)

・来年5月街中ジオ散歩として幕張海岸を予定している. 元千葉県立中央博物館の白井

豊氏と調整中.

7. その他執行理事会の下に設置される委員会及び組織

1) 利益相反マネージメント委員会 (亀高)
なし

2) 若手育成事業検討WG (内野)

・2025年度研究奨励金の募集を開始予定. 募集期間: 2025年1月1日~2月28日. 今年で3回目の募集となる. 第1回支給者に研究成果をNews誌へ投稿してもらうことも検討する. 奨励金の周知・宣伝にも役立つと考えられる.

3) 表彰制度検討WG (亀高)

なし

8. 理事会の下に設置される委員会

1) ジオパーク支援委員会 (矢部)

なし

2) 地学オリンピック支援委員会 (坂口)

なし

3) 支部長連絡会議 (杉田)

・支部メールの配信準備が整い, 現在, 各支部長と支部幹事あてにメール配信担当者の選出を依頼中. すでに連絡のあった支部のメール配信担当者には, 順次管理者ユーザーのIDとパスワードを通知済.

→担当者へ通知済 (5支部) 北海道, 中部, 近畿, 四国, 西日本

→まだ連絡無し (2支部) 東北, 関東

4) 地質災害委員会 (松田)

・防災学術連携体シンポジウム「阪神・淡路大震災30年, 社会と科学の新たな関係」(2025/1/7オンライン) 開催予定. セッション4学協会発表 阪神淡路大震災 30年に寄せてにおいて, 地質学会から氏家恒太郎会員 (筑波大) に発表いただく.

5) 名誉会員推薦委員会 (星)

なし

6) 各賞選考委員会 (亀高)

現在募集中. 12/2まで.

7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会 (山口)

なし

8) 法務委員会 (亀高)

なし

9) 若手活動運営委員会 (星)

なし

9. 研究委員会

1) 南極地質研究委員会 (委員長 大和田正明)

特になし

2) 法地質学研究委員会 (委員長 川村紀子; 杉田)

特になし

審議事項

1. 2025熊本大会巡検Fコースの日程変更 (ポスト→プレ) (高嶋) ポスト巡検 (9/17-18) 九州東部のジュラ紀付加体巡検をプレ巡検

(9/12-9/13) への日程等変更の希望があった. 中生代の層序関係の巡検がプレとポストで分散されるため, 参加者増にもつながると考えられる. 次回12月理事会に上程する.

2. 学術著作権協会へのAI利用に係る権利の委託について

概ね委託可と考えるが, JpGUなど他団体の対応状況も注視し継続審議とする. 次回の理事会でも意見を伺う.

3. 国立大学教育研究評価委員会専門委員の候補者の推薦依頼

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構からの要請のあった専門委員 (国立大学教育研究評価委員会専門委員および機関別認証評価委員会) 候補者として3名の会員を推薦することとした.

4. 各賞選考規則の一部変更案 (加藤)

学生優秀発表賞の対象者に「学籍のある正会員」を含むことを追記する提案. ただし, 上位規則である運営規則中の文言との整合性や, 受賞対象者の曖昧性が残るため, 運営規則と合わせて文言の整理・統一を図る必要がある. また, 支部例会等でも独自に学生への賞を設定しているケースがあるが, 現行の運営規則では, 学生優秀発表賞の対象が「学会が主催する講演会等」となっており, 支部での賞も被対象と見なすこともできる. 支部で設定する賞と区別するためにも運営規則に「日本地質学会の学術大会」と明記することを検討する. 各賞選考規則の文言を整理し, 次回理事会へ上程する.

5. 各賞選考委員会規則の一部変更案 (亀高)
現在, 選考委員は理事の互選により選出しているが, 理事以外の正会員からも委員を選出できるように文言を修正する. 次回理事会に上程する.

6. 理事会審議事項の確認

1) 2025年度総会の日程について

2) 2024年度事業実績概要 (案)

3) 2025年度事業計画骨子 (案)

4) 各種委員会の代表者変更, 委員追加の承認 (あれば)

5) 名誉会員推薦委員会委員の選出

6) 各賞選考規則・各賞選考委員会規則の一部変更

7) 2025熊本大会巡検Fコースの一部変更

8) 学術著作権協会へのAI利用に係る権利の委託について

9) その他

監事コメント

(岩部) 各賞選考規則の変更については, 誤解が生じないような文言にして欲しい. また, 熊本大会では大きな赤字が出ないように, 発注内容の精査と必要に応じて見直し・工夫を行って欲しい.

(山本) シニア会員向けのアンケート及びその対応は, 会員数減少を食い止めるための鍵にもなる重要な活動だと考える.

以上
2024年12月14日
一般社団法人日本地質学会
会長(代表理事) 山路 敦
署名人 執行理事 亀高正男

2024年度 第7回執行理事会議事録

日程：2024年12月14日(土) 10:00-12:00
【WEB会議】

出席：山路 敦, 杉田律子, 星 博幸, 亀高正男, 内野隆之, 岩井雅夫, 内尾(保坂) 優子, 尾上哲治, 加藤猛士, 小宮剛, 坂口有人, 高嶋礼詩, 辻森 樹, 細矢卓志, 矢部 淳

監事：山本正司, 岩部良子

欠席：大坪 誠, 松田達生, 山口飛鳥

事務局 澤木

*定足数(過半数：10)に対し、執行理事17名の出席

*前回24-06議事録案は、本執行理事会にて承認された。

報告事項

1. 全体的報告

・JpGU学協会長会議が11/27に開催された(山路会長出席)。JpGU事務局に一部加盟学協会の事務を委託する件の検討結果(現状では対応不可)や2026年JpGU-AGU Jointの準備状況(原則英語発表の方針)などが報告された。

2. 運営財政部会(加藤・細矢)

1) 総務委員会

<共催・後援依頼, 他団体の募集, 連絡等>
・蒲郡市生命の海科学館より、第15回惑星地球フォトコンテスト入賞作品展終了の報告があった。10/25-11/24開催。入場者数6,292人。

・声明：寿都町および神恵内村における「核のゴミ」処分計画が概要調査に進ことに反対する 一問題点の多い文献調査報告書の提出に抗議する一(「核のゴミ」地層処分問題の全国声明呼びかけ人：赤井純治・岡村 聡・関根一昭)の送付があった。

・苗場山麓ジオパーク学術研究奨励事業助成金募集の案内があった(2025/1/31締切) →【メルマガ11/19, ニュース誌12月号掲載】

・「Techno-Ocean 2025」(2025/11/27-29; 神戸国際会議場)に対する協力(協賛)依頼があり、承諾した。

・名古屋大学宇宙地球環境研究所が文部科学省の国際共同利用・共同研究拠点としての新規認定を受けることとなり、申請時の地質学会からのサポートレターに対して礼状が届いた。

<会員>

1. 今月の入会者：なし
2. 今月の退会者：なし
3. 今月の逝去者：1名
名誉会員(1名) 小西健二(逝去日：2024年10月25日)

4. 2024年11月末会員数
賛助：36, 名誉：36, ジュニア会員：6, 正会員：3155 [一般2017, シニア860, 学生278] 合計3233(昨年比-47)

5. 前回(8/31)理事会以降の逝去者氏名(4名)

名誉会員(2) 佐藤 正(逝去日：2024年9月15日)/小西健二(逝去日：2024年10月25日)
正会員シニア(2) 田中 保(逝去日：2024年9月14日)/辻 隆司(逝去日：2024年10月18日)

6. 年度末退会&除籍予定者の回覧

①2024年度末退会予定者(37名)

②2024年度末除籍予定者(57名)

<会計>

・学術著作権協会より2024年度著作権使用料等分配金の連絡があった。126,026円(12月中旬入金予定)。

<その他>

・業務委員会の規則の作成状況新規に作成された規則は次回(4月)理事会で承認を得る予定。未提出の委員会は早急に提出し欲しい。

3. 広報部会(坂口・内尾・大坪・松田)

1) 広報委員会(坂口)

・ウェブサイトリニューアルの進捗状況：旧バージョンのワードプレスで作成された2件のコンテンツはセキュリティ上問題があることが判明した。これらは近年内容が更新されていないため、バックアップを取った後、一旦閉じる。アクセス状況等を確認して今後アップデートと再公開を検討する。また、前回理事会で挙がった要望2件については対応済み。

・支部のページについては、杉田委員長に支部長連絡会議で要望や今後の運用について聞いてもらう。

・今年度中の公開に間に合うように、ホームページの作成を進めて欲しい。

4. 学術研究部会(辻森・尾上・高嶋・山口)

1) 行事委員会(高嶋・山口)

・2025熊本大会：使用会場が概ね確定し、全般として順調に進んでいる。山形大会の反省を生かすため、決算状況をLOCに伝える。

・2026金沢大会：巡検コースは検討中。正確に情報共有するため、今後は行事委員長からのメールはLOC関係者全員あてに送信することとした。また、会場アクセスのための路線バス増便も検討中。バス会社に価格を確認した上で検討を進める。

・2027筑波大会

2) 専門部会連絡委員会(尾上)

特になし

3) 国際交流委員会(辻森)

特になし

4) 地質標準化委員会(内野)

特になし

5) 学術戦略WG(尾上)

特になし

6) ショートコースWG(山口)

特になし

5. 編集出版部会(小宮・辻森)

1) 地質学雑誌編集委員会(小宮)

(1) 編集状況報告(2024年12月14日現在)

・2024年投稿論文：57(昨年比+2)[内訳] 論説25(和文23, 英文2), 報告13(和文11, 英文2), レター6(和文6), ノート2(和文2), フォト1(和文1), 特別寄稿1(和文1), 巡検案内書9

・査読中28, 受理済み0, 入稿・校正中5, 130巻公開済み34件(408ページ)

(2) その他

・今年度のナウマン・小澤・棚山賞受賞者にレビュー論文の執筆を依頼し、全員から承諾を得た。

2) Island Arc編集委員会(辻森)

・新編集委員会の体制案が確定した。編集委員長2名の交代のほか、編集委員に2名の女性研究者を追加。来年1月から発足し、現編集委員長はしばらくは補佐業務に携わる。

3) 企画出版委員会(小宮)

・「大地と人の物語」の企画の進捗は概ね順調。

6. 社会貢献部会(矢部・岩井・坂口)

1) 地学教育委員会(岩井)

・山形大会ジュニアセッション開催報告・審査協力へ謝辞

・地質技術者教育委員会とJABEEオンラインシンポジウムを共同開催(地質技術者教育委員会報告参照)

・生涯教育委員会とオンライン会議を開催(12/8), 連携強化・合同企画について継続協議。

2) 地質技術者教育委員会(加藤)

・第5回JABEEオンラインシンポジウム

2024年11月14日(木) 第1回合同打合せ

内容：標記シンポジウムでの連携協力を確認、プログラム案の検討

出席：(地質技術者教育委員会) 加藤副委員長, 亀尾委員, 坂口委員, 佐々木委員, 林委員, (地学教育委員会) 岩井委員長

2024年12月2日(月) 第2回合同打合せ

内容：プログラム詳細の確認、講演者の選定・依頼状況の確認

出席：(地質技術者教育委員会) 加藤副委員長, 亀尾委員, 坂口委員, 佐々木委員, (地学教育委員会) 岩井委員長, 矢島委員, (その他) 講師：今井校長(高知県立室戸高校) シンポジウムの開会・閉会挨拶は、山路会長と杉田副会長にお願いする。

・キャリアビジョン誌

現在申込受付中(12/20締切), 12/13現在申

込数69社（昨年度実績100社）。

3) 生涯教育委員会（矢部）

シニア会員向けアンケート案作成中。冒頭の案内文で学会におけるシニア会員の活躍の必要性を追記する。第3回理事会でアンケート内容を説明した後、年内に会員に送付する（回答締切は来年1月末）。4月の第4回理事会で結果を報告予定。

4) 地震火山地質こどもサマースクール（岩井）

2025年度は御岳山、2026年度は気仙沼・三陸で開催予定。2027年開催地は現在募集中。

5) 地質の日（矢部）

1/12に街中ジオ散歩の下見を幕張海岸で実施予定。

7. その他執行理事会の下に設置される委員会及び組織

1) 利益相反マネージメント委員会（亀高）

特になし

2) 若手育成事業検討WG（内野）

来年1月から若手研究奨励金の募集受付を開始。ホームページのFAQを更新。

3) 表彰制度検討WG（亀高）

特になし

8. 理事会の下に設置される委員会

1) ジオパーク支援委員会（矢部）

特になし

2) 地学オリンピック支援委員会（坂口）

・12/15一次予選開催。参加者約2,000名。参加者にはジオルジュ最新号を配付。

3) 支部長連絡会議（杉田）

・支部におけるシニア会員の活動について、各支部に状況の聞き取り中。2つの支部より回答あり。

4) 地質災害委員会（松田）

・来年1月に開催される防災学術連携体シンポジウムの学協会発表に、筑波大の氏家恒太郎氏を推薦。

5) 名誉会員推薦委員会（星）

・2025年度名誉会員推薦委員会委員案を策定。理事会代表幹1名の決定については第3回理事会に上程。

6) 各賞選考委員会（亀高）

・現在募集中。12/20まで締切延長中。

7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（山口）

特になし

8) 法務委員会（亀高）

特になし。

9) 若手活動運営委員会（星）

・今年度の活動および来年度の活動計画についての報告書が提出された。来年2/14の地質系業界オンライン交流会には5社に参加頂く予定。当該企業・機関に地質学会長名で依頼文を送付する。

9. 研究委員会

1) 南極地質研究委員会（委員長 大和田正明）

特になし

2) 法地質学研究会（委員長 川村紀子；杉田）

特になし

審議事項

1. 運営規則、各賞選考規則および各賞選考委員会規則の改正（加藤・亀高）

文言の統一など一部不十分なため、引き続きワーキンググループを中心に要検討。本日午後の理事会では改訂のポイントについて頭出しのみ行い、最終案を来年4月の第4回理事会に上程する。

2. 理事会資料の確認

2025年度事業計画骨子案については、第3回理事会では方向性のみを説明する。細部については、今後修正を進めて行く。

監事コメント

（山本）シニア会員の学会引き留めのためにも、当該会員が活躍できる場の検討を進めて行って欲しい。熊本大会では山形大会の反省を生かして特に収支はしっかり検討してもらいたい。

（岩部）ホームページ改訂は重要であり、次期学会選挙までにはより使いやすいものに整えてもらいたい。今後の作業スケジュールをしっかりと押さえて進めてください。

以上

2025年1月11日

一般社団法人日本地質学会
会長（代表理事）山路 敦
署名人 執行理事 亀高正男

2024年度 第8回執行理事会議事録

日程：2025年1月11日（土）13:00-15:00

【WEB会議】

出席：山路 敦、杉田律子、星 博幸、亀高正男、内野隆之、岩井雅夫、内尾優子、大坪 誠、尾上哲治、加藤猛士、小宮 剛、坂口有人、高嶋礼詩、松田達生、矢部 淳（14時退出）、山口飛鳥

監事：岩部良子

欠席：辻森 樹、細矢卓志、山本正司
事務局 澤木

*定足数（過半数：10）に対し、執行理事16名の出席

*前回24-07議事録案は、本執行理事会にて承認された。

報告事項

1. 全体的報告

・執行理事会の会議時間短縮のため、報告事項については各自、事前に記載された議事次第を確認しておくこととし、会議では必

要に応じて担当者が説明を行う形式とすることにする。会議時間は2時間程度を目標とし、実現可能なら開催日を平日19時頃からに変更する案が出された。まずは来年度5月の会議で試験的に実施したい。

2. 運営財政部会（加藤・細矢）

1) 総務委員会

<共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等>
・地盤技術フォーラム2024（24/9/18-20；東京ビックサイト、地質学会協賛）の終了報告があった89団体出展、入場者8,932名。

<会員>

1. 今月の入会者：なし

2. 今月の退会者：1名

正会員一般（1）木村太星

3. 今月の逝去者：1名

正会員シニア（1）千代田厚史（逝去日：2021年6月4日）

4. 2024年12月末会員数

賛助：36、名誉：35、ジュニア：6、正会員：3154 [一般2016、シニア860、学生278] 合計3231（昨年比-46）

<会計>

特になし

<その他>

・地質学雑誌編集委員会、企画出版委員会、生涯教育委員会、地質標準化委員会の規則案を総務委員会内で確認した結果を担当執行理事に返送し、内容確認を依頼した。その後執行理事会を経て理事会承認の予定。

3. 広報部会（坂口・内尾・大坪・松田）

1) 広報委員会（坂口）

・HPリニューアルは、現状確認作業継続中。
・Xのフォロワー数は2945人（2025/01/09現在）。24年6月時点より約1000名増加。フォロワーの約7割は非会員。

4. 学術研究部会（辻森・尾上・高嶋・山口）

1) 行事委員会（高嶋・山口）

・2025熊本大会：巡検案内書の投稿が開始された（4/9コース）。巡検案内書編集委員会は、九州大学のメンバーを中心に発足済み（委員長：尾上哲治）

・2026金沢大会：日程は9/12（土）～14（月）あるいは9/13（日）～9/15（火）の3日間。休日に実施するアウトリーチ巡検を学会大会日程に合わせるなら、学会としては後者の方が都合よい。

・2027筑波大会：会場は筑波大学、あるいはつくば国際会議場を検討中。大学開催の場合、交通アクセスを考慮して、駅・大学間の路線バス増便等の対応が必要。一方国際会議場は利便性は良いが使用料が高額の見込み。経費面も考慮して引き続き検討を進める。LOC委員長は筑波大学の氏家恒太郎氏。

2) 専門部会連絡委員会（尾上）

特になし

3) 国際交流委員会 (辻森)

特になし

4) 地質標準化委員会 (内野)

特になし

5) 学術戦略WG (尾上)

特になし

6) ショートコースWG (山口)

特になし

5. 編集出版部会 (小宮・辻森)

1) 地質学雑誌編集委員会 (小宮)

(1) 編集状況報告 (2024年12月31日現在)

・2024年投稿論文: 64 (昨年比+7) [内訳] 論説26 (和文24, 英文2), 報告15 (和文12, 英文3), レター6 (和文6), ノート2 (和文2), フォト1 (和文1), 特別寄稿1 (和文1), 巡検案内書13
査読中30, 受理済み3, 入稿・校正中0, 130巻公開済み39件 (492ページ)
・引用文献の日英併記の必要性について, 廃止を希望する意見があるが, 国際的なデータベース (例: Scopus) への搭載を希望する場合は必要. 今後執行理事会内で議論したい.

2) Island Arc編集委員会 (辻森)

特になし

3) 企画出版委員会 (小宮)

特になし

6. 社会貢献部会 (矢部・岩井・坂口)

1) 地学教育委員会 (岩井)

特になし

2) 地質技術者教育委員会 (加藤)

・キャリアビジョン誌掲載の申込結果 (坂口): 117社, 131ページ (※2023年度: 99社・113ページ, 2022年度: 91社・101ページ, 2021年度: 73社・92ページ, 2020年度: 25社・28ページ). キャリアビジョン誌について, 執行理事から「効果の検証」, 「高校 (生) への配付」, 「有名企業の勧誘」などの意見が出された.
・第5回JABEEオンラインシンポジウム: 開催日: 2025年3月2日 (日). ①1月下旬~2月上旬 第1回講師打合せ (スケジュール詳細, タイトル・内容の確認, 他) ②開催数日前 第2回講師打合せ (発表デモ, 当日の運営・操作確認, 他)

3) 生涯教育委員会 (矢部)

・シニア会員へのアンケートを作成し, メールアドレス登録のある会員約560名に12/27に配信した. メールアドレス登録のない約300名に向けてはハガキ (QRコード付き) を配信する予定で準備を進めている (印刷費: 約3,500円, ハガキ代: 約25,000円). 2月末をアンケート締め切りとする. 1/8現在, 110名から回答が寄せられている.

4) 地震火山地質子どもサマースクール (岩井)

・2026年度開催地公募に, 三陸ジオパーク・気仙沼市より応募があり, 3学会企画委員会委員 (地質学会からは柴田・岩井が出

席) ならびに三陸ジオパーク事務局員・気仙沼市担当者らとオンライン会議を行った (1月6日15時~18時). 最終意向を確認後, 次回企画委員会 (2月15日10時~開催予定) にて採否決定予定.

5) 地質の日 (矢部)

・街中ジオ散歩を幕張海岸で実施すべく, 1/12に下見を計画している.
・「地質の日」オンライン一般講演会について, フォッサマグナミュージアムで5/10 (土) にナウマン来日150年を記念した講演 (ハイブリッド開催) と, 複数の関係機関を結んだりレター配信を実施したい.

7. その他執行理事会の下に設置される委員会及び組織

1) 利益相反マネージメント委員会 (亀高)

特になし

2) 若手育成事業検討WG (内野)

特になし

3) 表彰制度検討WG (亀高)

・これから各賞選考規則の改正作業を予定

8. 理事会の下に設置される委員会

1) ジオパーク支援委員会 (矢部)

特になし

2) 地学オリンピック支援委員会 (坂口)

特になし

3) 支部長連絡会議 (杉田)

特になし

4) 地質災害委員会 (松田)

・2025年1月7日 (火) 10~18時半, 防災学術連携体シンポジウム「阪神・淡路大震災30年, 社会と科学の新たな関係」開催 (主催: 一般社団法人防災学術連携体 阪神・淡路大震災30年シンポジウム実行委員会). 地質学会からは筑波大の氏家恒太郎氏に発表頂いた.

5) 名誉会員推薦委員会 (星)

特になし

6) 各賞選考委員会 (亀高)

・各賞候補者の追加募集を12/20に締め切った. 推薦は13件.

・各賞選考検討委員会の委員8名を決定した.

7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会 (山口)

特になし

8) 法務委員会 (亀高)

特になし

9) 若手活動運営委員会 (星)

・熊本大会の前日 (9/13 (土)) に「学生・若手のための交流会」の開催を希望している.

9. 研究委員会

1) 南極地質研究委員会 (委員長 大和田正明)

特になし

2) 法地質学研究委員会 (委員長 川村紀子; 杉田)

特になし

審議事項

1. 2025熊本大会の予算と参加登録費

総務委員会から, 大会参加登録費の値上げおよび大会経費に関わる提案とコメントがあり, 議論した. 詳しくは下記の通りであり, 各項目ともに継続審議となった.

①学術大会事前登録費の値上げ: 山形大会の収支や熊本大会の試算から, 収支のバランスを取るためには, 学術大会の参加費は1.5倍程度まで上げる必要がある. 収入の増加対策や経費削減への取組みも併せて行うこととし, 事前登録費 (正会員一般) を引き上げることが提案された. 値上げについては概ね賛同の意見があり, 4月理事会で審議・承認を予定. このほか, シニア会員, 学生会員, 非会員の価格についても, 近年の会員種別ごとの参加実績を確認して検討することとした.

②年会開催補助費引当金の使用: コロナ前まで学術大会の費用は収支相殺を基本としてきたが, コロナ後は赤字が続いており, それを学会の全体会計の中で補填している. 熊本大会は, 開催後の収支あるいは決算時に, 年会開催補助費引当金の使用を検討すること. また, 経費削減及び収入獲得の工夫がなされる一方で, 大幅な参加費の値上げは避けられないが, 参加費値上げは会員離れにつながる可能性もある. このような状況を鑑み, 今後も極力大会内で収支バランスを取る方針 (収支相殺) を続けるのか議論が必要ではないかとの意見もあがった.

③来年度以降の課題・他学会との共催の可能性: 今後, 広告収入の取得や外注費 (委託費) 高騰に対する対策の必要性が強調された. 経費削減案として, 他学会との共催の可能性について意見が交わされた. 2011年に鉱物科学会との共催実績がある (第118年学術大会・2011年水戸). 会計的效果については要確認. 共催は学術的なスケールメリットはあるが, 運営側の負担が極めて大きいため, 十分な検討と準備が必要.

監事コメント

(岩部監事) 学術大会の参加費値上げについて, どの程度の収支バランスを目指すのか, 各種会員が納得できるような価格設定を考えてもらいたい.

以上

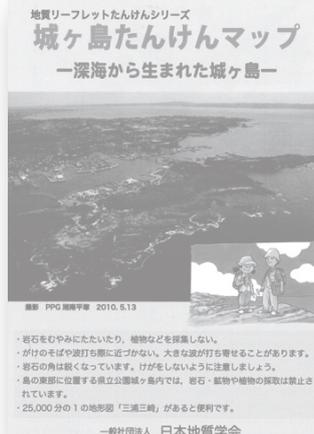
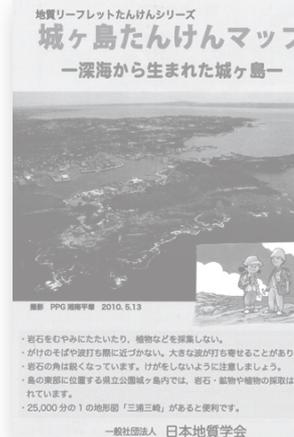
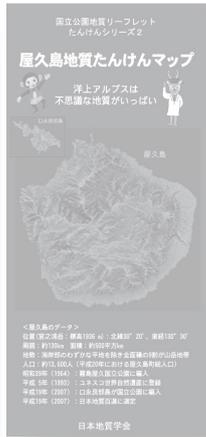
2025年2月15日

一般社団法人日本地質学会
会長 (代表理事) 山路 敦
署名人 執行理事 亀高正男



国立公園リーフレット

たんけんシリーズ



シリーズ1～5:好評発売中

- ①箱根火山たんけんマップ—今、生きている火山
- ②屋久島地質たんけんマップ—洋上アルプスは不思議な地質がいっぱい
- ③城ヶ島たんけんマップ—深海から生まれた城ヶ島
- ④富士山青木ヶ原溶岩のたんけん—樹海にかくされた溶岩の不思議
- ⑤長瀨たんけんマップ—荒川が刻んだ地球の窓をのぞいてみよう

A2版両面フルカラー印刷。
ハンディタイプで野外での観察に最適です。
教材としてもぜひご活用下さい。

定価 **400円**(会員頒価 300円)
※20部以上ご注文の場合は割引あり

購入希望の方は、学会事務局まで、 e-mail : main@geosociety.jp 電話 : 03-5823-1150

入会のご案内

入会ご希望の方は下記の入会申込書を一般社団法人日本地質学会事務局へお送りください。
入会には正会員1名の紹介が必要で、近くに紹介者となるべき会員がいいる場合はその旨お申し出ください。また、初年度の会費は
申込書郵送時から時間の間隔をおかずに下記送金先へ速やかにご送金ください。会員としての正式登録は、入会承認後、初年度会費
の入金を確認した上で、News誌の送付(4月号から)を開始いたします。

申込書郵送先: 101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F 一般社団法人日本地質学会
 学会費送金先: 郵便振替口座 00140-8-28067 一般社団法人日本地質学会
 ゆうちょ銀行 〇一九(ゼロイチキョウ)店/当座 0028067 / 一般社団法人日本地質学会(シ)にホシシツカツカ
 会費年額: 正会員(一般会員・シニア会員) 12,000円 ※1
 正会員(学生会員) 5,000円/年、2年パック会費額: 8,000円、3年パック会費額: 9,000円 ※2
 ジュニア会員 0円(年会費不要) ※3

※1: シニア会員は、入会年度の4月1日時点で65歳以上のかたを対象とします(4/2以降に65歳になる方は次年度からシニア会員となります)。

※2: 学生会員は、次の2点を守って手続して下さい。①学生証の写しを提出すること。②パック制会費を希望の場合は一括納入すること。

※3: ジュニア会員は、正会員の権利は有しません。学術大会での発表はジュニアセッションに限定します。

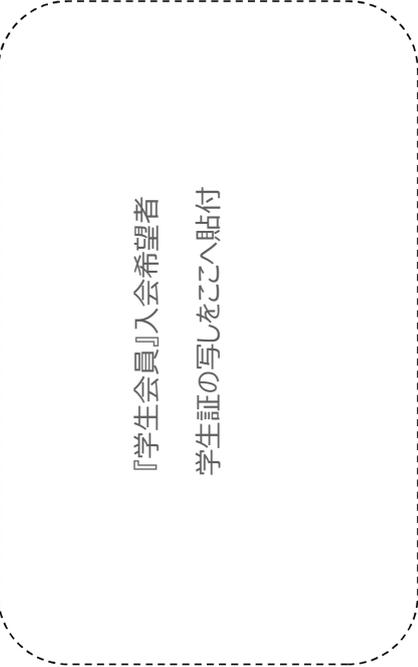
* 会員番号 * 学記入欄: Official use only

* 会員種別 正会員 (一般 シニア 学生)
 ジュニア会員

一般社団法人日本地質学会入会申込書 Application form for the Geological Society of Japan

本枠内のみにご記入ください

氏名(ふりがな) Name in Japanese	ローマ表記 family name	first name
____年____月____日 Mo. Day 生born on	Sex: <input type="checkbox"/> 男 Male <input type="checkbox"/> 女 Female	Country:
学歴 Academic career:	____学校 High school ____年卒業 Year completed	
____大学 University ____学部 Faculty ____年____月 卒業(見込み) Year completed	____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月 修了(見込み) Year completed	
修士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月 修了(見込み) Year completed	____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月 修了(見込み) Year completed	
博士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月 修了(見込み) Year completed	____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月 修了(見込み) Year completed	
自宅住所 Home address: (郵便番号 Zip code	____) ※学生証の写し忘れずに添えて下さい。	
電話 Phone: _____	ファックス Fax: _____	
所属機関名称・所属機関住所 Affiliation with address: (郵便番号 Zip code	____) ※郵便物がきちんと届けられるよう、ご記入ください。	
電話 Phone: _____	ファックス Fax: _____	
e-mail Address: _____@_____	※e-mail Addressは地質学会からのメルマガ配信用、その他連絡用に登録します。携帯電話各社のe-mail Addressを記入の場合は登録、たしません。ご注意ください。 ※所属先(代表)の問い合わせ専用 e-mail Address は記入しないでください。	
連絡先 Correspondence: <input type="checkbox"/> 自宅 Home <input type="checkbox"/> 所属機関 Office		



会員情報について: 在会者に限定し、Web版の会員管理システムにて会員情報の検索・閲覧をすることができます。氏名・所属先は掲載必須項目です。下記の項目について掲載を拒否する項目には にチェックを付けてください(チェックが無い項目は掲載承認いただいたものとします)。

最終学歴 所属先学科名・部課名(掲載不可の場合は「〇〇大学〇〇学部」, 「〇〇大学〇〇社」までを必須項目として掲載)
 所属先住所 所属先電話・FAX番号 自宅住所 自宅電話・FAX番号 e-mail Address

紹介者名(正会員) _____ 印
 Recommended by (name of member) _____ Signature

(学生のかた) 希望する会費額を選択して下さい。パック制会費選択者は、該当するパック制会費額を一括納入して下さい。
 5,000円(初年度のみ) / 2年パック: 8,000円(初年度・次年度) / 3年パック: 9,000円(初年度・次年度・次年度)
 学生会員として入会希望です。学生証の写しを入会申込書に添えて提出します。

専門部会の選択(任意) 現在、下記の14の専門部会が活動しています。専門部会に参加ご希望の方は登録をお願いします。所属希望の部会を3つまで選択することができます。(該当する項目に〇印を付けて下さい)

1. 地域地質 2. 層序 3. 堆積地質 4. 海洋地質 5. 構造地質 6. 岩石 7. 火山 8. 応用地質
 9. 環境地質 10. 情報地質 11. 古生物 12. 第四紀地質 13. 環境変動史 14. 鉱物資源

興味専門分野の選択(任意) あなたの興味専門分野を教えてください。3つまで選択することができます。(該当する項目に〇印を付けて下さい)

1. 層位 2. 堆積・堆積岩 3. 古生物 4. 構造地質 5. 火山・火山岩 6. 深成岩 7. 変成岩
 8. 鉱床地質(金属・非金属) 9. 鉱床 10. 燃料地質 11. 燃料地質 12. 地熱 13. 第四紀 14. 環境地質
 15. 都市地質 16. 土木地質 17. 土質工学 18. 水文地質 19. 探査地質 20. 土木工学 21. 情報地質
 22. 地震地質 23. 海洋地質 24. 地球物理 25. 地球化学 26. 地質年代学 27. 地理 28. 地学教育
 29. 考古学 30. その他 40. 地球惑星

(注)ご提供いただいた個人情報は、日本地質学会プライバシーポリシーに基づき適切に取り扱います。

* 受付(年 月 日) * 承認(年 月 日) * 承認(年 月 日) * 入金(年 月 日)
 振替・現金・銀行・他 * 送本(巻 号)

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003年9月19日 日本地質学会総会制定

2009年12月5日 一般社団法人日本地質学会制定*

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

1. 科学者としての倫理：会員は、専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては、法を遵守し、社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚、誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し、公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。

2. 知的交流の確保：会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める。

3. 人類と社会への責務：会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する。

日本地質学会

4. 地球環境への責務：会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。

5. 次世代への責務：会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る。研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009年12月5日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。



5月10日は
地質の日



ウェブで
チェック!

5月10日を中心に全国でイベント開催!

地質の日事業推進委員会事務局

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター

E-mail : geologyday-jimu-ml@aist.go.jp

Web : <https://www.gsj.jp/geologyday/>

地質の日事業推進委員会：(一社)日本地質学会、(一社)日本応用地質学会、(一社)日本鉱物科学会、資源地質学会、日本堆積学会、日本古生物学会、日本第四紀学会、日本情報地質学会 (2025年4月より日本情報地球学会)、(独)国立科学博物館、全国科学博物館協議会、神奈川県立生命の星・地球博物館、(国研)産業技術総合研究所、日本科学未来館、(地独)北海道立総合研究機構、(公社)東京地学協会、(一社)全国地質調査業協会連合会、(NPO法人)日本ジオパークネットワーク、大阪市立自然史博物館、(公財)阿蘇火山博物館、兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科 (順不同・2025年1月現在)

撮影地：福岡県 芥屋の大門 題字：高橋須葉